

国立身体障害者リハビリテーションセンター学院
リハビリテーション体育学科
同窓会会報



Rehabilitation
Sport

2004

第19号

PDF版

同窓会会報 第19号

もくじ

1. 第10回リハビリテーション体育同窓会報告

- ・第10回リハビリテーション体育同窓会プログラム . . . 3
- ・会員発表会 記録：鹿島秀（7期） . . . 4
- ・会員発表会 抄録
 - 中尾ひろこ（10期） . . . 7
 - 岩淵典仁（8期） . . . 7
 - 佐野美佳（8期） . . . 9
 - 斎藤健夫（8期） . . . 10
- ・RS同窓会10周年記念講演会 記録：服部直充（2期）
「Adapted Physical Activity 研究の動向と今後の課題」 . . . 13
講演者：中田英雄（筑波大学教育開発国際協力研究センター）
- ・定期総会 報告：長木希（5期） . . . 16

2. 会員近況報告 / 職場紹介

- ・11期生（今年度新規入会同窓会会員） . . . 19
- ・その他の期（1～10期）から . . . 23
（前年度から今年度にかけて転職された方など）

3. 学院情報

- ・12期生紹介 . . . 25
- ・11期生卒業研究テーマ・実習先 . . . 26

4. 会員活動報告

- ・第5回医療体育 / ASAPE 合同大会発表者抄録
 - 長木希（5期） . . . 27
 - 伊藤澄雄（5期） . . . 28
 - 河本耕一（10期） . . . 29
 - 遠藤晋（10期） . . . 29
 - 原田真由美（9期） . . . 30
 - 曾根裕二（9期） . . . 31
 - 五十嵐正雄（11期） . . . 32
 - 服部直充（3期） . . . 33
 - 鹿島秀（7期） . . . 34
- ・その他、外部での発表者抄録
 - 斎藤健夫（8期） . . . 35
 - 大林尚美（8期） . . . 39
 - 大河原（6期） . . . 45
 - 藤村和也（5期） . . . 47

1. 第10回 リハビリテーション体育同窓会報告

第10回 RS同窓会プログラム

日時：平成15年7月19日(土) 20日(日)

場所：国立リハビリテーションセンター 学院 6階中会議室

- 平成15年7月19日(1日目) -

受付 13:00 ~ (学院1階入口にて)
開会 13:30 会長 服部直充(3期)

1. 会員発表会 ~施設紹介・近況報告~ 座長 高居松次(4期)
 - (1)「大分県糸口学園児童課」中尾ひろこ(10期)
13:40 ~ 13:55 (質疑応答含)
 - (2)「職場紹介 ~国立伊東重度障害者センター~」岩淵典仁(8期)
13:55 ~ 14:10 (質疑応答含)
 - (3)「長野厚生連 鹿教湯三才山病院 医療体育科の取り組み」佐野美佳(8期)
14:10 ~ 14:25 (質疑応答含)
 - (4)「障害を持つ子供たちのスポーツへの参加の試み」斎藤健夫(8期)
14:25 ~ 14:45 (質疑応答含)紙面発表「てんかんを持つ息子の子育てから」黒田(旧姓：長尾)文子(3期)

2. RS同窓会10周年記念講演会 司会 服部直充(3期)
「Adapted Physical Activity 研究の動向と今後の課題」
講演者：中田英雄(筑波大学教育開発国際協力研究センター)
15:00 ~ 17:00

3. 懇親会 ~ RS同窓会10周年記念パーティー ~
18:00 ~

- 平成15年7月20日(2日目) -

受付 8:30 ~ (学院1階入口にて)

1. 院製紹介

9:00 ~ 9:20

2. 会員発表会 ~施設紹介・近況報告~ 座長 鹿島秀(7期)
 - (5)「養護学校での授業の紹介 ~重度グループでの取り組みを中心に~」曾根裕二(9期)
9:20 ~ 9:40 (質疑応答含)
 - (6)「障害者の体力」梅崎多美(2期)
9:40 ~ 10:00 (質疑応答含)
 - (7)「ドイツの障害者スポーツ指導員養成講習会に参加して」服部直充(3期)
10:00 ~ 10:20 (質疑応答含)

3. 期總會 司会 長木希(5期)
11:30 ~ 12:00

閉会 12:00 会長 服部直充(3期)

1. 第10回リハビリテーション体育同窓会報告

第10回 RS 同窓会 会員発表

記録：鹿島 秀（7期）

平成15年7月19日（1日目）

会員発表会～施設紹介、近況報告 座長 高居（4期）

「大分県系口学園児童課」 中尾ひろこ（10期）

8期 岡留氏から：大分県の支援費制度の状況（内容）を教えてください。

回答：児童課に勤務していて、よく把握出来ていません。

（児童課は措置費制度のままなので理解できていない）

5期 伊藤氏から：太鼓の演奏は呼んだら来てくれるのか。

回答：行きます。

「職場紹介～国立伊東重度障害者センター～」 岩淵典仁（8期）

8期 斎藤氏から：スポーツ訓練の目的に健康・体力面、運動技術面をあげているが、それらが向上することで何をねらいにしているのか。

回答：状況対応能力の向上を目標に体力、運動技術の改善をねらいとしている。

また、状況対応能力の向上によって、日常生活全般におけるリスクの閾値が上がる。

5期 長木氏から：国際障害者分類が改訂されたが、取り入れていないのか。

回答：現段階では勉強中、検討中のため取り入れていない。

「長野厚生連 鹿教湯三才山病院 医療体育科の取り組み」 佐野美佳（8期）

時間が無く、質疑応答は省略された。

「障害を持つ子供たちのスポーツへの参加の試み」 斎藤建夫（8期）

5期 伊藤氏から：どの様な種目が有効ですか。

回答：風船を使用した内容のものがいいです。

桐ヶ丘養護学校 松原先生から：

参加者が少ないとき子供を集めるには、親の会などの協力を得ると有効です。

9期 曾根氏から：親との関係をどのように作っていますか。

回答：活動を開始したばかりなので思考中です。

*「てんかんを持つ息子の子育てから」（紙面発表） 黒田（旧姓：長尾）文子（3期）

1日目はビデオの調子が悪く、撮影されていなかったため、発表者の記憶を頼りに作成させて頂きました。御了承ください。

第10回 RS 同窓会 会員発表

記録：鹿島 秀（7期）

平成15年7月20日（2日目）

会員発表会～施設紹介、近況報告 座長 鹿島（7期）

「養護学校での授業の紹介～重度グループでの取り組みを中心に～」 曾根裕二（9期）

《運動で行っている種目》

- | | |
|------------|-----------|
| ・ボールプール | 運動会種目 |
| ・トランポリン | ・きぶくれゲーム |
| ・シリンダーすべり台 | ・宇宙へGO など |
| ・ボールスライダー | |

《まとめ》（～「運動」の授業で気をつけていること～）

- ・他動的であっても、様々な動き、姿勢、速度を体験
- ・体験した感覚を受け入れるために、余韻を大切に
- ・随意運動が出やすいような姿勢作り
- ・大人も楽しむ

9期 石村氏から：シリンダー等の用具はどうしているのか。

回答：既存の物に工夫を加えて作っている。

2期 梅崎氏から：どの位の頻度で行っているか、また活動を行うことで何か変化があったか。

回答：頻度は週に1回。活動後の変化は、基本的に移動は介助の子ばかりだが、自分の順番になると首をあげてくれたりする。またウォーミング・アップの曲がかかると笑顔になる。

9期 石村氏から：実際の授業で、スイッチなどコミュニケーションを取る手段として使われているものがあれば教えて欲しい。

回答：スイッチを使ってコミュニケーションを取るのは、今回発表したグループでは難しい。それよりも特定の大人との関わりを深める方が重要。

「障害者の体力」

～脊髄損傷者の受傷経過別にみるフィールドテストの有用性について～ 梅崎多美（2期）

《目的》

フィールドテストを実施することで、機能レベル・受傷経過別の分析を行い、脊損者におけるフィールドテスト活用の有用性を検討する。

《対象》 病院入院患者	109名
更正訓練所入所者	91名
W/Cバスケットボール選手	38名

《測定方法》

20m走・3分間走・リピーターターン・握力（左右）・肩腕力（Push、Pull）

《結果》

- ・3分間走は20m走、リピーターターンで相関がみられた。
- ・W/Cバスケットボール選手においては3分間走と他のフィールドテストで相関がみられなかった。

《まとめ》

- ・入院患者において3分間走は、体力評価だけでは無く、ADL評価としても使用できると示唆された。
- ・W/C操作が未熟な段階では、3分間走は他の要因の影響を受けやすく、本来評価すべき体力要素を測定できない可能性がある。
- ・W/C操作の熟練した段階では、3分間走は持久能力の指標として有効である。

9期 曾根氏から：C6レベルでBI（バーサルインデックス）に相関が見られなかったのはなぜか。

回答：入院患者だとフィールドテストをこなせる状態ではなく、相関が出なかったと思われる。

ただ更正訓練所入所者では、若干の相関が得られている。

7期 鹿島氏から：3分間走にした理由は、

回答：国リハでは3分間走で相関が得られている。他でも同様の報告がある。また入院レベルであり、3分間走が妥当と思われる。

8期 佐野氏から：BIは初期のものを使っているのか。

回答：基本的にはそうだが、入院時から体育にオーダーが出るまで1ヶ月弱たっている場合もあり多少のズレはある。

「ドイツのリハビリテーションスポーツ指導者の養成について」 服部直充（3期）

《リハビリテーションスポーツ指導員の資格取得方法》

- ・地域スポーツクラブでの活動証明
- ・120時間の講習（16時間の救急法と14時間の実習を含む）
- ・4年に1回、更新のための講習が義務付けられる

《まとめ》

- ・ドイツ国民の3割がスポーツクラブに所属し、何らかのスポーツを行っている。
- ・2001年度のドイツの障害者スポーツ人口は、全国3480のクラブに334171人である。
- ・障害者スポーツとリハビリテーションスポーツの発展は、総合型地域スポーツクラブの存在が大きい。

7期 鹿島氏から：ドイツでは実施しているが、日本ではあまり行われていない疾患へのアプローチがあれば教えて欲しい。

回答：心臓病・がん患者に対するスポーツセラピーは日本より進んでいる。

8期 岩淵氏から：国民の3割がスポーツをしているが需要はあるのか。

回答：最近ではアメリカからのスポーツ施設も増えており、障害者でも運動できる地盤がしっかりしている。

第10回リハビリテーション体育同窓会報告 会員発表(抄録)

テーマ 施設紹介(大分県糸口福祉センター)

氏名: 中尾ひろこ

勤務先: 大分県社会福祉事業団 糸口福祉センター 糸口学園ふたば寮

対象となる障害: 知的障害児(定員40名)

職名: 生活支援員

勤務内容: 個性を伸ばす対応の充実を図り、身辺自立と社会適応能力の育成に向け、発達段階に応じた援助を行う。

対象者が児童であるため、平日は施設から養護学校に通っている。起床から就寝までの間の基本的な生活習慣の確立を目指して援助していく、また、親元から離れ集団生活の日課の流れにスムーズに対応できるように援助していく事が主となっている。また、通過施設であるため、卒業後の進路を検討しながら将来に向けた支援を行っている。

その他には、子供達の自立・自己実現・体力の維持増進・健康の維持増進・余暇時間の有効利用等を目的に、太鼓活動や陸上活動に取り組んでいる。このような活動は、養護学校から下校後の時間や休日の時間を利用して取り組まれている。

太鼓活動では、お祭りやイベント等で演奏を披露したり、障害者の全国大会(昨年は岐阜県、今年は東京都で開催)に出場したりしている。また、この他にも健常者の大会に出場したり、健常者の太鼓チームと合同合宿を実施したり、地元の学校と太鼓で交流したり、と幅広く地域で活動を行っている。

陸上活動では、全体をそれぞれの状態に合わせて陸上部・ウォーキング部・ジョギング部と3つの段階に分け、全国障害者スポーツ大会に出場する選手のレベルから職員と共にウォーキングを実施する等様々なレベルに合わせて実施している。卒園生の中には、他の成人施設へ行っても陸上活動を継続し、全国・世界大会に出場したり、県内一周駅云に選ばれるような選手もいる。また入所時、肥満によるいじめで登校拒否状態の児童が陸上活動で減量し、通勤寮を目指すようになってきている例もある。

国立伊東重度障害者センターにおけるスポーツ訓練について

8期 岩淵 典仁

1 スポーツ訓練とは

スポーツを通じてひとりひとりの残存機能から実現可能な身体活動能力や状況対応能力の向上などを図ることを目的として、残存機能を把握した運動学習と明確に意識された身体の使い方の訓練をします。また、運動習慣を身につけたり、生涯スポーツに結びつく体験を提供します。

2 目的

- (1) 機能・形態: 関節を動かす範囲や体脂肪率などの維持、改善を図ります。
- (2) 健康・体力: 瞬間的に運動する能力、長い時間を継続して運動する能力、細かく正確に運動する能力などの向上を図ります。
また、健康を保つような運動習慣を身につけます。
- (3) 運動技術: 運動加技術(車椅子操作技術)を通して思い通りにいつでも正確に、かつ効率的に身体各部を動かす能力を訓練します。
- (4) 社会性: 集団活動の場面を通して社会的な協調性や行動の規範(ルールを守るなど)を育成し、社会生活への適応性の向上を図ります。また、ゲームスポーツや競技スポーツの体験などを通じて、スポーツの爽快感、目標達成による自信など自己実現を援助します。

3 概要

- (1) 位置づけ：医学的リハビリテーションの一環として実施します。
- (2) 訓練対象者：医師が医学的判定を行ない、訓練指示票が出された方について実施します。
- (3) 訓練体制：対象者を2名の指導員で担当制をしき、週20時限のプログラムをひとりひとりの残存機能や訓練の進捗状況に応じて実施します。

4 内容

- (1) 機能・形態：セルフストレッチの指導や有酸素運動による体脂肪率の改善などを中心に行います。
- (2) 健康・体力：走種目（10m 走、40m 走、3分間走、10分間走、1000m 走、スロープ走など）やゲームスポーツ（ツインバスケット、車椅子バスケットボール、大玉バレーボール、ジャンケンサッカー、ミニビリヤードなど）を用いて健康、体力の維持・増進を図ります。
- (3) 運動技術：運動技術（車椅子操作技術）の理論・運動指導を通じて残存機能を把握した運動学習と意識された身体の使い方を獲得します。
- (4) 社会性：グループワークやリーダー制などを通して社会生活への適応能力の獲得を図ります。

5 評価

(1) 目的

入所者の体力状況、運動技術（車椅子操作技術）獲得状況、社会性を定期的に測定・観察して効果判定の指標とします。

(2) 内容

- ア 形態測定、クラス分類テストなどをします。
- イ 走種目の記録測定をします。
- ウ 運動技術（車椅子操作技術）の観察・分析をします。
- エ 訓練に対する意欲や態度を観察します。

(3) 方法

- ア 個々の入所時からの変化を絶対評価をします。
- イ 同クラス分類での相対評価をします。

6 スポーツ訓練関連行事

(1) ツインバスケットボール交流試合

社会参加を果たした重度四肢麻痺者の所外チームが自発的にセンターに来所し、その都度、ツインバスケットボールのゲームや退所後の生活に関する情報交換を実施しています。

(2) 県障害者スポーツ大会

年1回県障害者スポーツ大会種目へ参加を通じて、日頃の訓練成果を発揮し、競技としてのスポーツを体験することや他の障害者がスポーツに取り組む場面を見学しています。

平成15年4月1日現在

職場紹介

RS学科 8期生 佐野美佳

勤務先: 長野県厚生農業協同組合連合会 鹿教湯三才山病院

職種: リハビリテーション部 医療体育科 スタッフ2名

<外来診療>

内科、皮膚科、呼吸・循環器科、リハビリテーション科、整形外科

<入院診療>

医療保険病床 64床(うち回復期医療病床 34床)

介護保険病床 180床 合計 244床

<医療体育科の業務内容>

リハビリテーション部としての業務

1. 入院患者さんの体育訓練。
(現在4グループ。月曜日から金曜日までの週5日、1回1時間のグループ訓練)
2. 個別体育訓練
3. デイサービスに来る方に対する体操・レクリエーション(グループ)
4. 地域の健康教室指導、出前講座(定期的な教室...真田町、青木村、丸子町)

健康管理科としての業務

1. 1泊および日帰り人間ドックの体力テスト
2. 集団健康スクリーニングへの協力

<グループ訓練>

Aグループ・・・立位での運動可能

Bグループ・・・立位は取れるが、支持なしでの移動は不安定。低体力。超高齢者

Cグループ・・・車椅子グループ。車椅子を自分で駆動できる。座位保持はできる

Dグループ・・・痴呆のある方や動作がゆっくりな方。

<今後の課題>

- ・評価の見直し・・・高齢者の何を評価していくのか。現在の評価方法を見直していく。
- ・グループの見直し・・・今後、病院は今以上に重度の患者様受け入れていく方向にある。
- ・研修会などの企画・・・病棟訓練を担当するケアワーカーとともに、よりよいサービスを提供できるように勉強会などをしていきたい。

障害を持つ子供たちのスポーツへの参加の試み

* 青柳 雅夫 * 村山 由典 * 永宮 明典
 * 理事長人 兼 会長 * 大分県民会館
 * 社会福祉法人 * 障害者自立支援センター

はじめに

- ・障害を持つ子供たちは、健常児と比べて、スポーツを行う機会が少ない。
- ・学校が週休2日制になり、余暇時間の過ごし方がクローズアップされている。
- ・普通校へ通学している子供も、体育の授業を見学することが多い。
- ・障害を持つ子供たちの多くは、施設に在籍している。

試み

対象: 高校生以下の障害を持つ子供

目的: 地域社会で継続的に推進することのできるスポーツプログラムの作成

方法: ジュニアスポーツクラブ
シチズンシップスポーツフェスティバル

これまでの経緯

- 平成13年度
 - ・三重財団法人福祉事業助成を受けて、平成13年12月19日(水)～平成14年2月3日(日)の間に開催、某県学校の体育館を使用。
 - ・参加料包, 800円/回、1回/2軍の規模で合計7回実施。
 - ・最終日に活動の発表の場として、シチズンシップスポーツフェスティバルを開催。
- 平成14年度
 - ・中村裕紀彦 身体障害者福祉財団の助成を受け、活動を実施。
 - ・啓蒙活動を中心に、参加費を無料にて開催。
 - ・規模は2か月をワンサイクルで、2サイクル実施(1・7月、11・12月、2・3月)。
 - ・別府市の障害施設にて、定期的に活動を開催。
 - ・平日ではなく、週末を利用して活動を展開。
- 平成15年度
 - ・参加料800円/回、規模は3ヶ月をワンサイクルで、2サイクル実施予定。(1・7月、9～11月、1～3月)
 - ・週末及び平日に活動を実施中。

ジュニアスポーツクラブとは？

“からだを動かすことの楽しみや喜びを知ってもらうこと”をねらいに、用具や種目の工夫をすることで、障害を持つ子供たちを中心に、いろいろな身体活動を通して、遊ぶことの出来る場所を提供する活動

パンフレット



プログラム作成

1. 作成の流れ

事前情報の収集

↓

目的・目標設定

↓

スポーツ種目の工夫・決定

↓

プログラムの完成

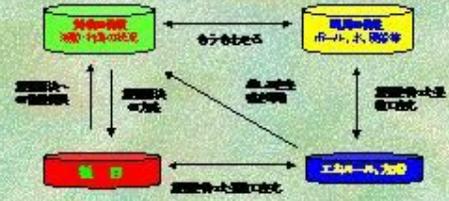
↓

プログラムの実践

- 参加者の特徴
- スポーツを実施する際の留意
- 参加者のニーズ

2. スポーツ種目の工夫・決定

①. 対象と用具の相互作用から



②. 対象が不特定多数の場合

様々な対象者に対応できる
工夫！



実施したプログラム





問題点・対応策

●平成13年度 ⇒ 平成14年度●

問題点 ⇒ 球技等

1. 参加者が少ない ⇒ 子供たちの集まることへ向けて（旧総合体育センター）
2. スポーツ等についても、はげしいもの ⇒ 実施の場で研修してもらう
3. クラブフェスティバルの開催が中絶する ⇒ クラブ活動を中心に、展開する。
4. ボランティアの確保と育成 ⇒ 活動の魅力を研修してもらう
5. 定期的な活動が困難 ⇒ 2日目をコンパイルの形で、年2回活動を実施
6. 練習が重なり子供が参加できない ⇒ 参加できるプログラムの作成に注力し入れ替え

●平成14年度 ⇒ 平成15年度●

問題点 ⇒ 球技等

1. 参加者が少ない⇒ 特定しない ⇒ 昨年度の継続 ⇒ 子供（保護、普通）や親の会へアプローチ
2. ボランティアの確保と育成 ⇒ 後方支援との関係をはたかせる。 ⇒ 委員会との関係（サポート方法やJOCのような場での普及） ⇒ 大分県障害者スポーツ指導者協議会との関係を作る
3. 定期的な活動が困難 ⇒ 2日目を2日へ ⇒ 平日と平日に活動を行う ⇒ 活動へのアクセスへの配慮 ⇒ プログラムの訴求を高める ⇒ 特定した多発者の確保 ⇒ マンパワーの確保・育成
4. 先につながる場の確保 ⇒ 大分県障害者スポーツ指導者協議会との協力体制を作る。（新しい場とタイアップできるようにする。）

今後の展望

- ・既存のスポーツに参加することが困難な障害を持つ子供たち対象に、活動を展開すること。
- ・身体を動かすことを楽しむことを前提とした活動の場の提供をすること。
- ・活動を通しての気づきを育てながら、個人のニーズにそぐう方向性模索していくこと。

RS同窓会 10周年記念講演会

講演会記録：服部 直充（2期）

「Adapted Physical Activity 研究の動向と今後の課題」

筑波大学 教育開発国際協力研究センター 中田英雄

1. Adapt の意味

If you adapt to a new situation or adapt yourself to it, you change your ideas or behaviour in order to deal with it successfully.

適応体育、アダプテッドスポーツ、ディサビリティスポーツ、障害者スポーツなどさまざま呼び方がされている

2. APA の定義

APA refers to movement, physical activity, and sport in which special emphasis is placed on the interests and capabilities of individuals with limited condition (Dol-Tepper, et al. 1990)

APA is a cross-disciplinary theory and practice related to lifespan activity of individuals, whose function, structure, or appearance requires expertise in (a) assessing and Adapting ecosystem and (b) facilitating societal changes for:

equal Access

integration/inclusion

lifespan well

movement/self-actualization

3. APA の専門家の養成

1) ヨーロッパ障害者体育/スポーツ修士号 1991年

ベルギーのLeuven 大学を中心に9つの連携大学院の制度+28のパートナー大学
チャレンジしてほしい。人的ネットワークの構築に意義がある。

内容に関しては学院RSと大差がない。日本のほうが進んでいる場合もある。

2) ヨーロッパ障害者体育・スポーツ学士号

Trino を中心に8つの大学

4. APA の研究分野

APA は、crossdisciplinary (学際的) なもの

リハビリテーション、運動セラピー、医学、社会学、建築学、歴史、スポーツ科学、心理学、特殊教育、人間工学など

たとえば車椅子の開発には人間工学が必要など

アダプテッドスポーツ科学の本の出版準備中

5. アダプテッドスポーツの科学

1) アダプテッドスポーツの科学的支援

科学とは何か 100人中99人が納得する——客観性があること。証拠を持つこと。

こういう指導をしたらこうなるといって、明確でなければならない。

多くは経験的にやっているが、みんなが納得できるものに置き換える。

私しかできない、やれないでは意味がない。こうしたらこうなるといって理論があり、専門に勉強したらできるもの。

2) 障害をもつ人の体力を科学的にとらえ、科学的な支援をする

- 可能性に対する科学的支援
- 楽しみに対する科学的支援
- 安全性に対する科学的支援

可能性に対する科学的支援

体力や運動スキル、広義・狭義のリハビリテーション
個人の筋力アップ、また環境を整えることも含む

<可能性の追求とは? >

競技スポーツの魅力とは、美しい・高い技術・芸術的であり、見ていて面白いもの
不可能にチャレンジする、潜在能力を引き出す

楽しみに対する科学的支援

スポーツの内容や参加の機会 興味や関心、ニーズの分析
知的障害だからということで単にレベルを下げたプログラムを提供するのではなく、彼らがチャレンジできるものを提供するべきで、指導者が合わせた(と思ってやった)ものでも実は楽しんでいないのかもしれない。

- ・参加したくなるアダプテッドスポーツ
- ・充足感のあるアダプテッドスポーツ
- ・再び参加したくなるアダプテッドスポーツ

参加者を楽しくさせる科学

安全性に対する科学的支援

疾患と運動強度(一番遅れている分野であり早急にやらなければならない)、補助具の安全性(人間工学にもとづく使い勝手)と
耐久性

6. 科学的な支援、科学的なサービスとは?

これでもかこれでもかというほどに尽くすこと(尽くしても尽くしきれないもの)

1) Evidence based adapted sports

Evidence とは、立証するため必要なもの、証拠ラテン語ではっきり見えるもの(わかる)もの

2) あなたはどうしてその指導をしているのですか?と問われたときに、こういう裏づけがあってやっているのだという根拠・証拠を持つこと。過去の研究で、このことはすでに一定の評価を得ているといったものが必要。指導者が30年の経験に基づいてやっているものや、自分しか知らない秘伝ではダメ。ひとり一人が常に疑問を持って取り組む必要がある。この分野のevidenceを探して確立していかなければならない。

3) データは容易に不正ができるが、でも結局はその不正はばれる。

研究は、学会などで認められてはじめて価値がある 日本体育学会、医療体育研究会など発表する。自分ひとりで書いて、内輪で終わってしまっただけでは意味がない。客観的な評価を受けることが重要である。

4) 研究とは目に見えない変化を目に見える変化にすること。

インターフェースとして筋電図、心電図、脳波計、心拍計などの機械を使って評価できるものがある。

5) 一般的に障害を持つ人はパフォーマンスが低いと言われている。

先天眼のひとが非常に優れた体性感覚を持っていたりする。それを覆すようなデータを明示するには発想の転換をする必要がある。

固定観念、先入観、stigmaの打破

学院RS学科1期～10期の卒業研究

障害別に分類

脳卒中片麻痺(11) 脊髄損傷(10) 高齢者(10) 視覚障害(10)
脳性まひ(6) 知的障害(3) 聴覚障害(3) 頸髄損傷(2)
胸髄損傷(2) インクルージョン(2) 自閉症児(1) 神経筋疾患(1)
筋ジストロフィー(1) 下肢切断(1) 二分脊椎(1)

ライフワークとして取り組んでほしい。

英文抄録が2題すばらしいと思う(できれば必須にしてほしい)

これまでとは違う視点で今までやられていないものを作ってほしい。

ASAPEの設立から16年で障害者スポーツ科学ができた。

日本体育学会の中に障害者スポーツに関する専門分科会を作る動きがある。

勉強、研究できる場は特に東京ならたくさんある。

たった一度の人生だから、カードを切ってほしい!

7. アジア障害者体育・スポーツ学会 (ASAPE)

1998年 第5回大会 筑波大学
2000年 第6回大会 台湾
2002年 第7回大会 香港
2004年 第8回大会 インドネシア

8. International Federation of Adapted Physical Activity(IFAPA)

1993年 第9回大会 横浜(バンフィコ横浜)
1995年 オスロ
1997年 ケベック
1999年 バルセロナ
2001年 ウィーン
2003年 ソウル

9. APAの課題

- ・障害のある女性とスポーツ (gender)
- ・重度障害のある人のスポーツ
- ・Classification
- ・障害者に対する社会のイメージ
- ・アダプテッドスポーツに対する社会のイメージ
- ・補助具の開発
- ・開発途上国におけるAPAの支援 ASAPE

定期総会報告

報告：長木 希（5 期）

1. 日時 平成 15 年 7 月 20 日（日）
 2. 場所 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院
 3. 役割分担
司会・書記：長木 希（5 期）
議長：岩淵（8 期）
選挙管理委員：原田真由美（9 期）
 4. 出席 正会員 87 名中、14 名（委任状 48 通）
 5. 議事録
- * 議決については、出席会員の過半数にて可決とする。
* 会則の改正については出席会員の 3 分の 2 以上にて可決とする

（1）1, 2 号議案について

[説明]

- ・ 1 号議案について会長より議案書のとおり説明
- ・ 2 号議案について事務局担当理事より説明

[質疑応答]

（7 期鹿島）

同窓会会員名簿はどこに入っているのか？

（会長）

10 年記念誌の CD に入っている

[結果]

議決結果 1 号、2 号議案賛成多数にて可決

（2）3 号議案について

[説明]

- ・ 3 号議案（14 年度卒業生の新会員承認）について会長より説明
（現在 2 名から入会申込の返信があり入会を希望している。連絡のない卒業生には再度事務局から連絡をすることとし、卒業生は新会員として承認することとする）

[結果]

議決結果 3 号議案賛成多数にて可決

（3）6 号議案について

[説明]

- ・ 6 号議案について会長より議案書のとおり説明
- ・ 6 号議案 3 について 10 年記念誌収支一覧について編集委員（梅崎）より説明

[結果]

議決結果 6 号議案賛成多数にて可決

(4) 7号議案について

[説明]

- ・7号議案について選挙監理委員より説明
立候補なし
信任投票にて実施

[結果]

議決 全員信任

平成 15 年度役員

会長；伊藤澄雄（5期）
副会長；服部直充（3期） / 高居松次（4期）
監事；河本千穂（10期） / 坪田大仁（11期）
事務局担当理事；栢本健一（7期）
企画担当理事；石村祐輔（9期）
情報担当理事；安江徹太郎（6期）
各期代表理事 1期；赤川洋
2期；梅崎多美
3期；中村和子
4期；高居松次
5期；佐野里美
6期；田島外志美
7期；厚地朋子
8期；佐野美佳
9期；原田真由美
10期；遠藤晋
11期；五十嵐正雄

[会長よりその他の係について説明]

事務局員 10期 遠藤晋（事務局担当理事の負担が大きいため）
情報担当補佐 9期 伊藤秀一
通信部 RS ネット係 3期服部、6期安江、6期大井
通信係 新会員から決定する予定

(5) 5号議案、4号議案について

[説明]

- ・5号議案（平成15年度実施事業計画案）について議案書のとおり会長から説明
- ・4号議案（平成15年度予算案）について事務局担当理事より説明

[結果]

議決結果 5号・4号議案賛成多数にて可決

(6) その他の検討事項

(5期伊藤) 同窓会の開催場所について、変更を検討してはどうか。

(5期長木) 同窓会の活動目的にあるように、これまで学院生・学院とのつながりを作る場ということで学院で行っていた。同窓会の目的についてどう捉えるかも考える必要があるのではないかと。

(3期服部) 同窓会は学院生が実習前に卒業生との交流を深めるなどという目的も持っていて、開催時期を3月から7月に変更にした経緯がある。年度末は会員にとっても仕事の関係で忙しいという意見があり7月開催になったが、実際には7月開催により学院生の出席が困難になっているようである。開催時期についても検討が必要ではないかと。学院との交流を考えると3月開催の方が良いのではないかと。遠方になると学院との交流は難しいのではないかと。

(9期曾根)9期生は3月から7月開催の移行期に卒業したため、同窓会に入りにくい(出席しづらい)ように感じた。また、夏は夏祭り等の行事と重なり出席しづらい。

(2期梅崎)卒業生にとって卒業式直後の3月開催の方が同窓会に入会しやすいのではないかと。学院としても3月開催の方がよい。

(5期伊藤)学院開催は学院(学院教官)の負担が大きいのではないか。そういう意味でも開催場所を変更しても良いのではないかと。

(2期梅崎)例えば2年に1回は学院で開催し、もう1回は遠方で開催すれば、学院生との交流もでき、遠方の会員が参加しやすくなるというメリットがあるのではないかと。

(10期福永)外部(他大学の学生など)に対しての学院の宣伝も兼ね、同窓会(RS)に興味を持っている学生に来てもらえるようにアピールしたらどうか。開催場所を移したときもその地域の大学にアピールして同窓会に来てもらえば宣伝広報活動になる。

(5期長木)RSのアイデンティティの確立を目指すという意味では外部への啓蒙活動は重要だと思うが、同窓会は基本的に同窓生の集まりでは。現在はリハビリテーション体育士会が発足しているし、リハビリテーション体育士会がそうした啓蒙活動を行う会と捉えることができないかと。そういったことを考えると同窓会の中で行う活動の一部はリハビリテーション体育士会に移行することも検討してよいのでは。

(3期服部)例えば同窓会の研究会や発表会をリハビリテーション体育士会に移すということも考えられるがその辺りはどうか。

(9期石村)学年が違くと知らない人が多く、同窓会といっても交流は難しい。出席することで何か得るものがあつた方がよい。やはり研究会や施設紹介などは同窓会に残して欲しい。

[検討事項] 同窓会開催時期について、3月の開催

[結果] 議決結果 賛成多数にて可決

[検討事項] 同窓会開催場所について、場合によっては学院以外の場所で行うことがあつてもよい

[結果] 議決結果 賛成多数にて可決

[検討事項] 同窓会の活動目的について 今回の総会での意見を踏まえ理事会で再検討

2. 会員近況報告 / 職場紹介

11期生 (今年度新規入会同窓会会員)

氏名:五十嵐 正雄 <11期>

勤務先 : 有限会社エムダブルエス日高

派遣先 : 医療法人日高会日高病院 総合ケアセンター

職名 : 介護員

対象者 : 介護保険対象者

業務内容 : 総合ケアセンターには理学療法部門、作業療法部門、言語療法部門があり、利用者様それぞれにあったプランでリハビリプログラムが実施されています。

私は主にPTフロアで、PTの集団リハの時間に行うマット体操や椅子体操の指導や、マット上で出来るレクリエーションを行っています。

他にHotPack、平行Bar、起立台、マイクロウェーブ照射などを行う際の利用者様の介助なども行っています。また送迎バスの添乗も行っています。

近況報告: 昨年は既存の体操を自分なりのアレンジで行う程度だったので、オリジナルの体操や運動を思案しています。病院がCCACに力を入れ始めているので、スポーツの分野でアプローチ出来たらと考えています。

1. 氏名: 加藤直美

2. 勤務先: 愛知県立佐織養護学校

3. 職名: 非常勤講師

4. 対象者: 知的障害児

5. 勤務内容: 週15時間…遊びの時間、生活単元、算数、音楽、図工、体育、その他の授業を主で担当したり補助的な働きをしたりする。

週2回…スクールバスの添乗

6. 現状の説明と今後の抱負: 現在は非常勤という立場で主に小学6年生の授業に入っています。自分一人だけで担当しているのは週2時間の算数(4人の児童)のみで他の授業は複数の先生とともに指導に当たっています。現在体育の時間にはマット運動を行っており四苦八苦している状態です。今後の抱負としては児童にわかりやすい説明の仕方や、楽しみつつ目標を持って積極的に取り組むことができるような方法を考え動きのレパートリーを増やしたり、運動経験を多く持たせたりしたいと考えています。

- 1) 名前 佐藤紀子
 2) 勤務先 Parked Home for Children with Disabilities (タイ)
 3) 職名 Rehabilitation Sport Specialist
 4) 対象者 7～40才の障害児、者 約400名
 (肢体不自由、知的障害、視覚障害、聴覚障害、重複障害)
 5) 勤務内容 勤務時間 8.30 - 16.30 (月 - 金)
 担当時間 9.30-10.30
 13.30-15.00 (13.30-14.30 / 14.30-15.30)
 16.30 - 18.00
 内容 月、水、金 / Recreation, recreation Sport
 火、木 / Swimming (冬期は月、水、金に同じ)
 * 16.30-18.00 はPLAY ROOM (不定期)

主に1人で担当しているが、活動内容により生活棟介助員の協力を要請することもある。

6) 現状の説明と今後の抱負

約400人の障害児の生活施設で、リハビリテーションというよりはレクリエーション、レクリエーションスポーツ、障害者スポーツを紹介、指導している。特別な医療上の管理が必要な子ども以外はすべての子どもを対象としているため、一人当たりの活動時間、活動量が少ないという問題がある。一般的な運動用具、遊具がそのまま使用されているため、それぞれの障害に適したように特別ルールを設けたり、用具を工夫、創造したりすることを実践している。しかし、施設職員のリハビリテーション等への理解度、意識はかなり低く、Rehabilitation Sportの定着は難しい。最大の問題点は、子どもたちに対する職員の無関心である。愛情不足となりがちな子どもたちに対し少しでも愛情を注ぎながら、子どもたちの自己表現、能力開発の機会を提供していければ、と思っている。

氏名 : 鈴木 学

勤務先 : 独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構 滋賀障害者職業センター

職名 : 障害者職業カウンセラー

対象者 : 身体障害者、知的障害者、精神障害者、その他

勤務内容 : ハローワークとの連携し、就労にあたり何らかの障害がある方への支援

近況報告 : 知的障害や精神障害があり、労働習慣など職業準備性を向上させる必要がある方に対し、ワークトレーニングを実施しています。

その中の余暇活動のカリキュラムでは集団スポーツを行っており、セルフチェックスキルの向上など、スポーツが、就職を目指す方にとっても効果があることが認められれば、各都道府県にある組織なので、RSにとってもビジネスチャンスとなるのではないかと密かな野望を持って活動しています。

1. 氏名 坪田 大仁

2. 勤務先 東北福祉大学大学院 総合福祉研究科 社会福祉学専攻 修士課程在籍

3. 現状の説明と今後の抱負

学院卒業後、福祉の中でこそ、これまで学んだ医学的知識、実技を生かすことができるのではないかとこの考えから、より高度な知識と技術、また専門分野に止まらない、広い視野で物事を見定める「目」を養うことを自己目標とし、大学院へ進学。

今後、様々な障害のある方やそのご家族の方々への援助活動を踏まえて、そこから見えてくる社会問題を分析し、さらには解決方法を探り、それらを理論化することで、広く人々の「自己実現」を支援していける高度専門職を目指していきたい。

- (1)氏名:広野友美
 (2)勤務先:社会福祉法人にじの会 大沢にじの里
 (3)職名:支援スタッフ
 (4)対象者:知的障害者
 (5)業務内容:生活支援
 (6)近況報告:現在は昨年4月に東京都三鷹市にできました知的障害者の入所更生施設に勤務しています。生活支援中心の仕事ですので、余暇の選択肢の一つとして様々な運動を提供していければと考えています。

氏名 本田 春彦
勤務先 学校法人 東北文化学園大学
職名 助手
勤務内容 演習や実習、実技の授業サポート、研究活動
現状と今後の抱負 大学の業務は社会福祉の演習や実習、障害者スポーツの初級、中級の授業サポートが主たるものですが、授業のサポートをしながら学生とともに学ぶ毎日です。
 研究は、地域のお年寄りの要介護予防事業に参加させていただいており、その資料をもとに身体の健康と心の健康について整理しながら、精神保健の分野での研究を深めていきたいと思いを。
 今年(2004年)は日本老年社会科学会、来年(2005年)は医療体育研究会/アジア障害者体育・スポーツ学会日本支部合同大会が仙台で行われる予定です。事務局はRS創設期から講師をされている植木先生を中心に運営されますが、私も事務局員として在仙RS卒業生と共に学会をバックアップしていきたいと思いを。

- 1.氏名:宮嶋利成
 2.勤務先:千葉県千葉リハビリテーションセンター
 3.職名:リハビリテーション体育士
 4.対象者:肢体不自由者更生施設利用者35名、病棟入院患者4名(16.1.21現在)
 5.現状の説明および今後の抱負:昨年4月より嘱託職員として、センター内の肢体不自由者更生施設に配属されました。配属当初は、MST(メディカル・スポーツ・セラピー)という名称を引き継いだのですが、機能回復を強くイメージさせる医療体育という概念よりも、むしろ自立生活や社会参加に向けてよりグローバルな意味での心身の向上を目的とするため、RS(リハビリテーション・スポーツ)という名称に変更しました。現在、嘱託1名でRS業務を行っております。更生施設でのRSは、35名を障害の程度別に7グループに分け、1グループ週1回、1コマ100分で行っています。対象の疾患は主に、脳血管障害、脳性麻痺、脊髄性疾患、高次脳機能障害などです。他にも病棟からのオーダーがあり、常時4~6名の入院患者を個別に対応しています(1コマ50分)。そのほとんどが頸・脊髄損傷患者であり、主に、「車いす操作能力の向上」や「筋力・持久力の増大」を目的に訓練を行っております。

- 1.氏名 山縣美智
- 2.勤務先(正式名称) 大阪府立茨木養護学校(高等部)
- 3.職名 常勤講師
- 4.対象者 肢体不自由児、知的障害児
- 5.勤務内容 指導教科「保健体育」「自立活動」
その他「つくる・ふれる」「しぜん」「あそび」「からだ」など
ADLの介助
- 6.現状の説明と
今後の抱負等 私は現在、重度重複生徒の担当をしています。言葉でのコミュニケーションが難しい子どもたちの言いたいこと・伝えたいことをどのようにすれば、理解できるか・引き出せるかということを常に考えながら試行錯誤を繰り返す毎日です。
そのような毎日の中で、一瞬でも子ども達と通じ合ったと感じられるときに今の仕事にやりがいを感じます。
多くの障害についての知識がまだまだ不十分であり、身体へのアプローチが未熟であるので、今後実践を積んでいながら知識・技能を高めていきたいと思っています。
その中で学院時代に学んだことを活かしていけるように頑張ります。

氏名, 山田祥子

勤務先, 社会福祉法人長岡福祉協会(ケアハウスさくら、デイサービスセンターさくら、身体障害者通所授産施設さくら)

職名, 体育指導員

対象者, 高齢者、身体障害者

勤務内容, レクリエーション指導、介護予防教室・転倒予防教室の講師

現状の説明と今後の抱負,

私の勤務する法人は現在、病院、教育機関、高齢者、障害者(児)施設約200箇所の施設を運営しています。体育指導員の仕事は現在、主に高齢者を対象としたものが多く、特に市の高齢福祉課から委託された地域の方を対象とした健康維持や体力向上を目的とした転倒骨折予防教室を重視しているようです。体操や骨や筋肉の話、栄養指導などを組合せて楽しく運動が出来るように計画するようになっています。法人内の施設の移動もあり、これからいろいろな施設で勉強したいと思っています。

2. 会員近況報告 / 職場紹介

その他の期(1~10期生)から

< RS 9期生 近況報告 >

石村 祐輔

聖母療育園 平成16年3月退職予定(3年間勤務)

伊藤 秀一

現在、介護老人保健施設ひばりウェルネスタウンという所にいます。“老人”と冠っていますが、施設内には保育所、カフェ、だがしや、理容室、図書コーナーなどがあり、小さい子から老人まで、様々な人が出入りしています。高齢者にとって小さな子供はとてつもなく大きな存在で、その姿が目に入るだけで、表情が緩みます。各行事は、できるだけ地域住民を巻き込むようにしており、“施設”ではなく、“地域の一角”になるよう日々を過ごしています。

曽根 裕二

東京都立の養護学校に勤めています。3年目になり、仕事自体には慣れてきたのですが、子ども達は日々、予想外のことをしたり、想像以上の成長を見せたりと、刺激的な毎日を送っています。教育実践は、児童・生徒と教員がお互いに成長していくということを実感させられる毎日です。

高木 富士男

現在、福岡県にある福岡市立障害者スポーツセンターに勤めています。
運営は社会福祉法人の福岡市社会福祉事業団が行っています。当施設は障害者の方々々がスポーツ・レクリエーション活動を楽しみながら健康の維持・増進を図り、多くの人々との交流を図る場として活用していただくことを目的に昭和59年に開館されました。施設は、温水プールとバドミントンコート4面とれる体育館をメインに様々な活動が行われています。
私は、施設を利用されるお客さんが楽しい時間を過ごせる様に自分なりに考えて仕事をしています。また、当施設は障害者スポーツ協会九州ブロックの事務局が設置されており、協会本部と九州の障害者スポーツ指導員のパイプ役としてやっています。
現在、私は学院を卒業してから嘱託職員として勤務していますが、とても楽しくやっています。

辻奥 沙織

昨年の4月に突然の異動で、長居障害者スポーツセンター指導課から、(社福)大阪市障害者福祉・スポーツ協会 スポーツ振興部に配属になりました。事務員としての日々の中で、やはり私は指導員に未練が大ありのようです。仕事内容は、大会運営や講習会の企画・運営や、全スポへの大阪市選手団派遣等(全て役割は総務)です。

中本 淳子

現在、川崎市立東桜本小学校というところで勤務しています。今年度は4年生を担当し、「来年は5年生を持つんでしょ？」と
もっばら言われています。

また、川崎市障害者スポーツ指導者協議会の方の仕事を手伝わせていただいたり、スポーツ大会の手伝いをしたりしていま
す。今年は初級の講習会にも非力ながらお手伝いさせていただきました。日々弁勉強の毎日です！

上野(野口) 良子

昨年の秋に結婚して、野口良子から上野良子になりました。現在、財団法人近江兄弟社介護老人保健施設ウーリス老健セン
ターに在職していますが、今年の3月22日に出産予定の為産休中です。育児休暇後は復職する予定です。

現在は、色々準備しながらのんびりした毎日を過ごしています。

橋本 順治

原田 真由美

現在は、国立身体障害者リハビリテーションセンター病院運動療法部門で非常勤職員として働いています。契約期間は今年の
3月31日までです。4月以降の就職先を探して、現在就職活動中です。漠然とですが、地域に密着した形での仕事・活動がで
きればいいな、というふうに考えています。

向田 怜子

3. 学院情報

第13期RS学科紹介

- No.0301 岩本 宏子(イワモト ヒロコ)
出身地:山口県 出身大学:早稲田大学 種目:ラクロス
特徴:田舎育ちのほのぼの系です。
- No.0302 内池 深咲(ウチイケ ミサキ)
出身地:京都府 出身大学:信州大学 種目:バスケ
特徴:常にハイテンションで、クラスの元気印です。
- No.0303 久保田 崇之(クボタ タカユキ)
出身地:愛媛県 出身大学:国際武道大学 種目:野球
特徴:一応!?委員長です。アルコール大好き。
- No.0304 小林 岳雄(コバヤシ タケオ)
出身地:東京都 出身大学:鹿屋体育大学 種目:陸上(短距離)
特徴:クラス唯一の!?インテリ派です。
- No.0305 清水 明日香(シミズ アスカ)
出身地:長野県 出身大学:奈良女子大学 種目:ダンス
特徴:喋り出すと止まらない!!ダンス少女です。
- No.0306 下川 祥(シモカワ サチ)
出身地:福岡県 出身大学:東京学芸大学 種目:陸上(短距離)
特徴:クラスの姉御的な存在です。実はあがり症...
- No.0307 白土 豪(シラト ツヨシ)
出身地:宮城県 出身大学:東北福祉大学 種目:スキー
特徴:キャラ特により、毎日いじられてます。羨ましい~!!
- No.0308 西村 志穂(ニシムラ シホ)
出身地:大阪府 出身大学:早稲田大学 種目:バレー
特徴:英語も話せる国際派。できる女風!?です。副委員長です。
- No.0309 三浦 雄高(ミウラ ユタカ)
出身地:神奈川県 出身大学:順天堂大学 種目:サッカー
特徴:アラビア語を駆使するアジア派...です。
- No.0310 油井 浩亮(ユイ コウスケ)
出身地:東京都 出身大学:東京学芸大学 種目:ラグビー
特徴:生粋のラガーマン。いい身体してます。

リハビリテーション体育学科 2 年生紹介

落ち込んだりもするけれど、
私は元気です！！

by エグサ

180cm、67kg、BMI20.7
1979,5,28生、O型、双子座
野球部兼サッカーマニア
好きな言葉：一期一会

十人十色

佐々木健司

野添真美です。
真美って書いてマナミって
読みます。

よろしく願い致します候。

吉田鈴美

ぼーっとするのが大好きです。
今後もよろしく願いします。

卒業研究のテーマ	
江草朋樹	「天井吊り下げ型歩行支援システム(フローラ)」を用いた免荷歩行時のエネルギー効率に関する検討
佐々木健司	リハビリテーション・スポーツの効果及び必要性についての一考察
野添真美	頸髄損傷(C7 レベル)女性の日常生活活動自立に向けた水泳活動によるアプローチ
吉田鈴美	車椅子バスケットボール選手におけるスピードに関する調査

	外部実習	外部実習
	平成 15 年 10 月 6 日 ~ 10 月 31 日	平成 15 年 11 月 10 日 ~ 12 月 5 日
江草朋樹	沢渡温泉病院	兵庫県立総合リハビリテーションセンター
佐々木健司	社会福祉法人 太陽の家	国立福岡視力障害センター
野添真美	埼玉県総合リハビリテーションセンター	沢渡温泉病院
吉田鈴美	神奈川県総合リハビリテーションセンター	国立別府重度障害者センター

4. 会員活動報告

第 24 回医療体育研究会 / アジア障害者体育・スポーツ学会日本支部会 第 5 回合同大会 発表者抄録

龍岡介護老人保健施設における集団訓練について 座位ステッピングを中心にー

龍岡介護老人保健施設 健康運動指導士 長木 希

- 【はじめに】当施設ではリハビリテーション部に健康運動指導士が所属し集団訓練を主たる業務として利用者に活動を提供している。評価としては体力測定があり、そのうち座位ステッピング（30cm 幅の線を踏まないように下肢を開いたり閉じたりする運動。20 秒間に何回行うことができるかを測定）を集団訓練において応用している。それらに焦点をあて活動を報告したい。
- 【目的】集団訓練における座位ステッピングを応用した活動を報告し、その意義について検討することを目的とする。
- 【方法】具体的な活動内容の紹介および座位ステッピングの回数と 10m 歩行速度の関係について考察する。
- 【結果】
- ・活動内容の紹介（座位ステッピングを応用した片足ステップ、交互ステップ、目標数値設定等）
 - ・座位ステッピングの回数と 10m 歩行速度の値の相関係数 $r = 0.58$ ($n = 41$) であり、危険率 0.1% で相関がみられた。
- 【考察】座位ステッピングに変化をつけ集団訓練として応用し、歩行能力の指標とすることで利用者の活動参加への動機付けとなることが考えられる。
- 【おわりに】介護老人保健施設において利用者が身体機能を維持していくためには活動量を多くすることが重要であると考えられる。座位ステッピング等を利用しながらより多くの活動を提供していくために集団での運動を指導する専門職が介護老人保健施設に必要ではないかを感じる。

地域保健センターでの健康実践活動の効果について

愛知県飛島村保健センター（民生部 保健福祉課）
健康運動指導士 伊藤 澄雄

飛島村の概況

位 置：愛知県の西南部に位置し、東は日光川を境に名古屋市に隣接している。

人 口：4,510人（平成15年10月1日現在） 世帯数：1,233世帯

職 員：保健師2名 管理栄養士1名 歯科衛生士1名 健康運動指導士1名 事務職員1名

はじめに

平成3年度より日本一の健康長寿村を目指し、健康長寿村推進事業を推進している。平成8年に保健センター、温水プール、トレーニングルーム等の入った複合施設すこやかセンターがオープンした。オープン当初より温水プールを使い、高齢者に対する健康づくりの一環としてプールを利用した教室（シルバーアクアフィットネス）を継続的におこなっている。15年度は34名の方とアクアエクササイズや水泳を実施している。今回は平成9年からのコース参加者の推移を示すと共に、老人医療対象者14名の方の医療費変化を示す。

シルバーアクアフィットネス 参加者推移

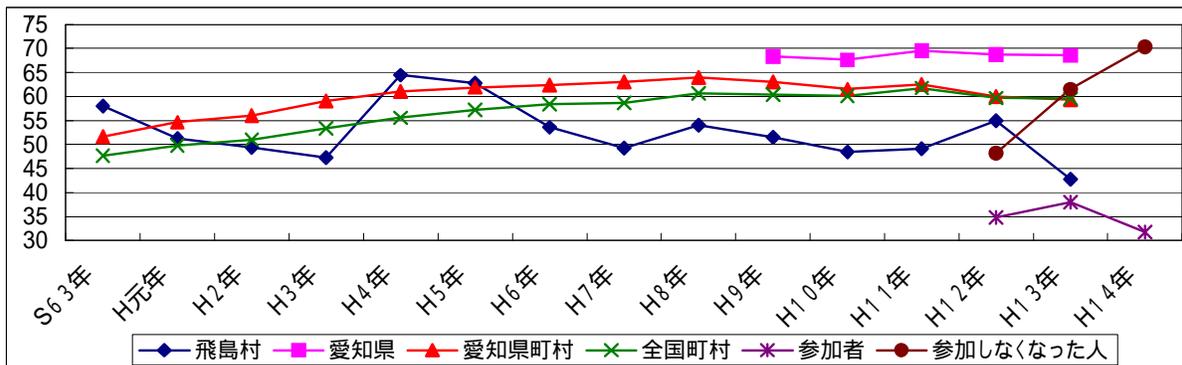
基礎コース（毎週火曜日 午前・午後）

自立コース（毎週水曜日 午後）

年 度	平9年	平10年	平11年	平12年	平13年	平14年
実施回数	21	24	24	24	30	38
参加人数	87	94	83	83	97	27
延参加数	345	427	324	297	459	523
参 加 率	74.2%	75.6%	65.1%	60.2%	62.2%	62.4%
平均人数	16.4	17.8	13.5	12.4	15.3	13.8

年 度	平11年	平12年	平13年	平14年
実施回数	33	34	38	27
登録人数	16	11	12	14
延参加数	201	206	259	235
平均人数	6.1	6.1	6.8	8.7

老人医療費の経年変化



結果

この教室は、毎年実践形態を変えて“年間を通じてプールに入れる”体制づくりにしてきた。現在までに約100名の60歳以上の方とプールに入り、年間延べ700人を越える参加数になった。

教室参加者の医療費(H12年348,134円、H13年370,498円、H14年317,744円以下同順)は、村の平均(549,139円、427,398円、H14はデータなし)よりも低くなっており、参加しなくなった方達は医療費(482,343円、615,421円、702,964円)が増えている。

まとめ

元々健康な方、健康について関心のある方達がプールに通っているため、医療費も平均を下回っていると考えられる。しかし長い目で見ると、プールで運動するといった“非日常的な活動”を続けられるということは、本人の健康維持・増進、医療費の抑制というだけに留まらず、家族や周りの人達のQOLにも大きな影響を与えようと考えられる。

本来は、実践活動に対する身体的な機能・能力の効果・向上を測定していくことが重要であるが、運動の専門職員は一人のため困難な部分も多い。そこで、町村では老人医療費の変化を軸に運動・健康づくりの効果を見ていくことができるのではないかと考える。また、運動・健康・リハスポーツの専門職の確立には、地域特性を把握した実践活動を増やし、事業費を抑制し、全体として住民の健康化・幸福化に寄与していくことが必要であると感ずる。

地域における転倒予防の測定・評価及びトレーニング法の紹介 簡便な初期負荷設定

河本耕一 松野宏美 米満弘之
(医療法人社団 寿量会 熊本健康・体力づくりセンター)
平嶋 すみ子(菊鹿町役場)

<目的>

現在、介護予防や転倒予防の必要性が叫ばれ、パワーリハビリテーションなどの運動プログラムが全国の地方自治体で話題とされている。しかし、測定結果から初期負荷設定までのプロセスは、運動指導者等の中で様々な基準に基づいて行われているのが現状であり、多くの関係者が頭を悩ませていると思われる。

そこで本研究では、現在、筆者が熊本県鹿本郡菊鹿町で実践している『地域で、自宅で、簡単に、楽しく行える転倒予防』への取り組みから、特に簡便に活用できる初期負荷の設定方法について紹介する。

<方法>

初期負荷設定の評価基準は、健脚度テストの総合得点である。これは10m全力歩行、つぎ足歩行など、特別な用具を必要とせずできるものである。これらの結果から、ロー、スタンダード、ハイレベルの3クラスを設定し、参加者のレベルアップに対応できるようにしている。

トレーニングメニューは下肢筋力向上を目指したものであり、『お尻上げ』、『脚上げ』、『脚横上げ』、『踵上げ』、『脚横上げ』、『スクワット』、『レッグランジ』の全6種目である。

<今後の課題>

一般的に老化は、人それぞれ異なるものでありその対応も千差万別だと考えられる。今後、このような高齢者に対して今回の測定・評価方法、トレーニング法が有効な指標、運動方法であるかを実践のなかで工夫し検討していくことが今後の課題である。

パーキンソン病患者に対するスポーツ指導の効果 - 身体運動機能とQOLへの影響 -

順天堂大学 長岡正範
医療法人社団白鳳会大角医院通所リハビリセンター 遠藤 晋

目的

スポーツにおけるさまざまな運動場面を経験することによって、自己と他者の関係を学び、様々な運動課題の成功や失敗の経験によって、自己の身体に対する認識を深める効果がある。パーキンソン病患者に対してスポーツが果たす役割を、身体運動機能測定とPDQ39によるQOL評価をもとに検討した。

方法

パーキンソン病入院患者3名の体力の各要素とPDQ-39を入院時、訓練終了時の2回測定した。

結果

測定上、体力の各要素で3対象者ともに向上が見られた。一方、3名のPDQ-39は移動に関連する下位項目である可動性は2例で改善が見られたものの、他の下位項目の変化は様々であり、下位8項目の平均値(single index)は1例のみの改善であった。

考察

約1ヶ月のスポーツ訓練実施により3例とも活動性が向上し、体力の各要素も向上したが、PDQ-39で示されるQOLには必ずしも反映されなかった。QOLには様々な要因が影響することが知られているが、特にパーキンソン病のQOLには、症状のup and down、合併症の存在、患者自身のライフスタイル、環境の変化、身体機能評価による陰性のフィードバック等が比較的強く影響している可能性がある。

高次脳機能障害者の発動性及びコミュニケーション能力 向上にアプローチしたリハビリテーション体育の一事例

原田真由美 樋口幸治 北村昭子

(国立身体障害者リハビリテーションセンター)

【目的】 高次脳機能障害者の身体的な障害は軽度であることが多いが、様々な認知障害等は重篤であり、一見するとその障害像の認識が困難であるため周囲からは理解されにくい。今回、復学を目標とした対象者に「発動性の向上」、「コミュニケーション能力の向上」を主な目的としアプローチした、リハビリテーション体育の一事例を報告する。

【対象者】 外傷性脳損傷による高次脳機能障害者。女性、16歳(高校1年生)。身体機能面として軽度な体幹・左上下肢失調。歩行は正常歩行スピードよりやや劣る状態で、短距離のジョギングは可能。易疲労性。高次脳機能面では、発動性低下、対人技能拙劣、コミュニケーション能力低下、感情失禁、注意障害、情報処理速度低下が認められた。

【方法】 入院約1ヶ月の間、3回/週・1h/1回、計11回実施。指導形体は「個別」、「対人」、「集団」で行った。

【結果】 身体機能面：正常歩行スピードに改善。「疲れた」の発言・座り込み減少。発動性：訓練内容に関して自ら質問・提案等をするようになった。コミュニケーション能力：対人技能に関しては、挨拶や自己紹介を自ら行うようになり改善が見られた。しかし集団の中では促しがなければ動かず、他患に自ら積極的に関わることは少なかった。

【まとめ】 開始当初の発動性の低さに対して若干の向上が見られた。コミュニケーション能力に関して、対人の場面では改善されたが、集団の中では促しがなければ他者との関わりを保つことができない状況であった。

家族や本人に学校環境の具体的な状況を聞き、復学後の実際の場面をシミュレーションした指導を行うなど、退院後の生活場面を見越した細かな指導計画を立てるアプローチが不足していた。

養護学校における身体活動を伴う授業の事例報告 ～主に重度重複障害児への実践～

曾根裕二（東京都立光明養護学校）

養護学校教育の義務制が実施されて20年を越える現在、教育現場では重度重複障害児（盲・聾・精神遅滞・肢体不自由・病弱の五障害種のうち二つ以上の障害を合わせ有するうに、精神発達の遅れが著しく、同時に行動面における問題も有し、常時介護を必要とする障害児）の占める割合は年々増えている。また、その障害像も重度化・多様化しているのが現状である。

重度重複障害児の教育目標の中心には「健康の維持増進」に関わることが前提としてある。身体活動を伴う体育の授業では、それに加え、「変形・拘縮の予防」、「経験の拡大」、「友達や教員との関係を深める」、「自分のできる範囲で身体を動かす、動かしたいと思う」などの目標が挙げられる。重度重複障害児の体育については、まだ歴史が浅く、対象となる児童の障害の種類と程度が多様であるため、教育現場では試行錯誤を重ねながら実践を行なっている。具体的には、トランポリンを使った活動、ボールプールを使った活動、台車を使った活動、スロープを使った活動などを行なっている。そのような活動の中で、様々な姿勢をとること、自分の身体を意識すること、様々な感覚を受け止めること、期待感を持つこと、楽しい雰囲気を共有すること、友達を意識すること等に気をつけている。しかしながら、運動面・認識面の障害などのために、動きや感覚を受け止める受動的な活動が中心となっており、児童の能動的な気持ちや動きを引き出せるような活動を設定するのは難しい。

重度児の成長・発達は多くの場合ゆっくりとしたものである。したがって、指導の効果を問うにあたっては長い間隔をとってみていく必要がある。また、動作の変化はもちろんのこと、表情などの微細な変化に目を向けなければならない。児童が一つの動きの感覚を受け入れ、それを楽しめるようになるためには、ある程度の期間が必要と考えられる。それ故に、教員の主観のみに頼った評価、活動のマンネリ化が生じる危険性もある。したがって複数の教員の目で見、考え、試行錯誤していくことが大切であろう。

【まとめ】

重度児の「運動」の授業における活動の成果や今後の課題として、以下のようなことが考えられた。

- ・重度児の「運動」の授業は、受動的な動きが中心になるが、様々な姿勢や運動を経験できる貴重な場である。
- ・活動がマンネリ化してしまわないように、教員の創意工夫（試行錯誤）が必要。
- ・教員間での共通理解を深める。

リハビリテーション体育学科卒業生に対する アンケート調査

五十嵐正雄（エムダブルエス日高）

藤本茂記（国立身体障害者リハビリテーションセンター）

【目的】

リハビリテーション体育学科（以下、リハ体育学科）卒業生の現状と、学科の教育内容やそれが卒業後のライフワークにどのような意味をもつのかを調査し、今後のリハ体育学科の展望について考察することを目的とした。

【方法】

対象はリハ体育学科卒業生 87 名である。58 の設問項目からなるアンケート調査用紙を作成し、郵便送付と聞き取りにより調査を実施した。

【結果と考察】

有効回答数は 60 件（69%）であった。教育内容と教育体制に関しては、肯定的な意見が大勢を占め、リハ体育学科で学んだことが現在の仕事や生活に役立ったとする者が多かった。一方、就職関係の情報提供や就職指導については、否定的な意見を持つ者が多く、卒業直後の就職先に現在も勤務する者は全体の 48% に過ぎなかった。就職情報の提供や就職指導は、「雇用側からの求人がある」ことが前提となる。リハ体育学科は設立後 10 余年しか経過しておらず、職場での実績が少ないことや、資格化が進んでないこと等による求人不足が、就職指導の妨げや転職に関連していると考えられる。

【まとめ】

今回の調査によって、本学卒業生の就職に関する問題点や、本学の教育内容と教育体制に対する意見などが明らかになった。これらの結果を参考に、具体的な提案を示していくことが今後の課題である。

ドイツの障害者スポーツ指導者の養成

服部直充（太陽の家） 中村太郎（障害者自立情報センター）

【はじめに】

2003年2月から1ヶ月間、ケルン大学治療教育学部のストローケンデル博士のもと障害児（者）の身体活動やスポーツについて経験する機会を得たので報告する。

【リハビリテーションスポーツ指導員】

ドイツにおけるスポーツの特徴にクラブシステムが挙げられる。人口の約30%が何らかのスポーツクラブに所属しており、障害者のスポーツに関してもこの影響は大きい。

2001年の調査では、全国に3480の障害者のスポーツクラブと334171人の登録者がいる。地域のスポーツクラブで活動するリハビリテーションスポーツ指導員の養成と認定は、ドイツ障害者スポーツ連盟（DBS）によって行なわれている。資格を取得するには、地域スポーツクラブでの活動証明、120時間の講習（16時間の救急法と14時間の実習を含む）4年に1回資格更新のための講習受講が義務づけられている。講習は、スポーツ全般とリハビリテーションについての総論を学んだ後、障害別コースの各論を学ぶシステムとなっている。

【スポーツセラピスト】

病院でのリハビリテーション過程において理学療法に引き続き行なわれるスポーツセラピーは、ドイツ健康スポーツ・スポーツセラピー連盟（DVGS）認定のスポーツセラピストによって行なわれる。DVGSは障害・疾患別に10の専門資格を設けており、DVGSが主催する講習会や、指定するカリキュラムを満たす大学・専門学校でセラピストの養成が行なわれている。

【おわりに】

ドイツの障害者スポーツは、リハビリテーションスポーツから余暇・生涯スポーツ、競技スポーツまで幅広く、地域スポーツクラブシステムのもとに機能している。スポーツをリハビリテーションの手段とするスポーツセラピーは、病院やリハビリテーション施設、地域の中で行なわれている。スポーツセラピーは、障害者がスポーツを地域のクラブで続けるきっかけを作り、生涯スポーツ（競技スポーツを含む）への橋渡しの役割を担っているといえる。

回復期リハ病棟への体育としての関わり方についての一考察

鹿島 秀（群馬県医師会沢渡温泉病院）

【はじめに】

当院は2000年12月より回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）の承認を受け、現在回復期病棟3棟（156床）、療養型病棟1棟（40床）となっている。回復期病棟立ち上げの段階から、病棟、他のリハスタッフ（PT・OT・ST・SW）同様に体育も関わりを持ち、協業してきた経緯を報告する。

【経過】

回復期病棟として実施していく上で、情報 病棟訓練 病棟環境 計画書 カンファレンス 疾病管理について検討を行い、回復期病棟として独自のマニュアル作成を目標とした。回復期病棟になり変化した点は、病床サイドの生活レベルの濃厚なアプローチとして、BADL(Basic ADL)をリハスタッフが直接介入し、情報交換やレクリエーションを病棟単位で実施したことであった。体育では回復期リハの基本概念として、国際障害者分類(ICF)中に、活動(Activity)の項目が設けられ、必要性や認識が新たにされたことで余暇的イメージから更に進んだ活動性や体力向上という要求を意識したものになってきた。具体的な取り組みとしては、体育館での股関節体操や卓球、バドミントン等の軽スポーツ、プールでの水中運動などが挙げられ、体力向上を前面に出される処方が増えてきた。

【今後の課題】

病棟ごとの情報交換やレクリエーションに時間的・人数的に参画できない事が多い。また体育としては疾患ごとのクリティカル・パスを病棟と協力して作成していく事が今後の課題である。

障害児におけるスポーツ導入時のプログラム作成の工夫

社会福祉法人 障害者自立情報センター 齊藤健夫、中村太郎
野田裕子、辛島裕樹
三ノ京佳代子

【はじめに】

当法人では、2001年10月より障害を持つ子供たち（以後、障害児と記す）に身体を動かす楽しみを知ってもらい、地域社会で継続的にすすめることのできるスポーツプログラム（以後、プログラムと記す）の作成とスポーツクラブ（以後、クラブと記す）を開催している。

本研究では、クラブを通して実施したプログラム作成の工夫を紹介し、少しでも質の高いプログラム作成につながることを検討した。

【クラブの開催について】

定期的にクラブを開催し、プログラムの立案・修正をしながらより実践的なプログラムの作成をした。対象は、在宅もしくは施設を利用している小学生以上高校生以下の子供たち（主に障害を持つ子供たち）とした。

活動頻度は、年3回で2~3ヶ月をワンタームとし月に3~4回、1回の活動時間を2時間程度で日曜日に行った。

【導入時の注意について】

障害児がスポーツに携わる際の注意点を、スポーツの捉え方、目的の設定、プログラム作成の視点、指導における視点の4つに整理した。

スポーツを捉え方：既存のルール化された身体活動と狭く限定して捉えるのではなく、遊びも含んだ身体活動と広く捉える。

目的の設定：競技性を重視した内容に重点を置くのではなく、身体を動かすことに興味を持たせる、自己信頼感や楽しみを得ることなどに視点を置く。

プログラム作成の視点：「どのようなスポーツをするか」という視点で、種目を個人に当てはめるのではなく、「どのようにスポーツをするか」という視

点で、対象（個人、集団）に対して種目を工夫していく必要がある。

指導における視点：指導者は対象（個人、集団）の特徴に応じて、『経験 体を動かす楽しみを知る』、『習得 取り組む積極的な姿勢』、『継続 意識して実施する姿勢』の視点で、まずは体を動かす楽しみを伝えることに重点を置き、対象に対して興味を持たせ、徐々に目的を設定しながら、楽しくできることの実感を持たせる。そして、意識してスポーツ（体を動かすこと）することにつながるようにすること。

【プログラム作成の工夫】

プログラムの作成は、既成の種目を参考にしながら、

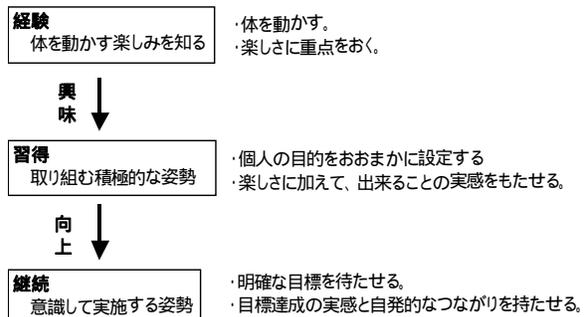


図1. 指導の視点

対象者の特徴、実施の上での課題、ルール・用具の工夫を整理しながら行います(図2を参照)。ここでは風船ポートボールを例に作成の過程を紹介する。

種目の選定過程

まず、ポートボールという種目を選定し、対象の特

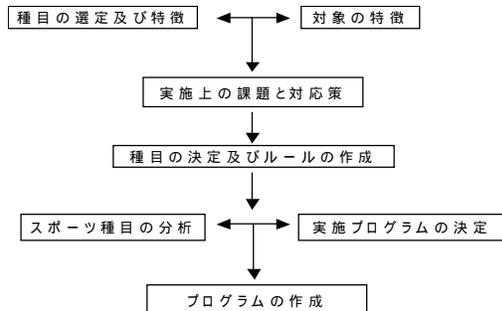


図2. プログラム作成の展開

徴を含み実施上の課題を導き出します。ここでは、ドリブルやパスを行うことに差がある、自力で移動することが困難であると2つです。課題の解決方法として、通常のボールを風船に変更する。介助が後方から車いすを押すという工夫を加えます。そして、

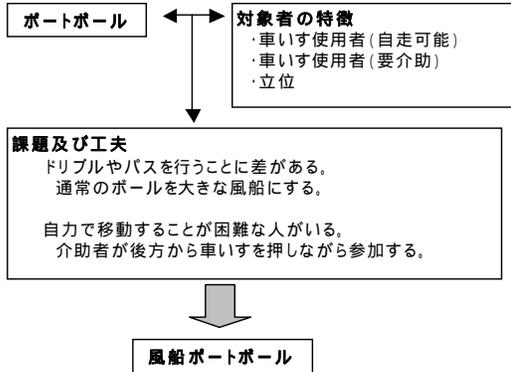


図3. 種目の選定過程

風船を使用してポートボールとして、風船ポートボールを選定します(図3を参照)。

作成過程

次いで、風船ポートボールの行為を分析・整理(選定種目の分析)し、実施プログラムの概要を導き出

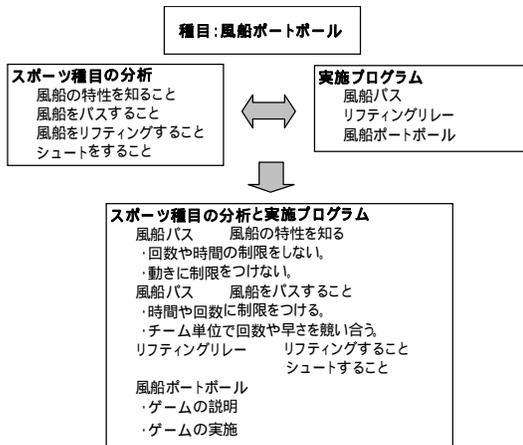


図4. 作成過程

し、構成をします(図4を参照)。

【考察】

スポーツをする動機、年齢、目的などは様々である。また、継続していく中で、それに取り組み姿勢や意欲も時間の経過とともに変化していく。一般的にスポーツをするという、

どうしても既成のスポーツに当てはめ、個人を評価する傾向があるように思える。子供がスポーツを開始する時、特に障害児に対しての導入時には、個人(マンツーマン、集団の中の個人)や集団の特性を考慮したプログラムが必要である。また、競技性を重視した内容はもちろんであるが、導入段階では、むしろ身体を動かす楽しさを体感することに主眼を置き、協働しあうこと、成功体験を通して自己信頼感を持つことなどの効果を期待していく必要があると考える。その際には、既成のスポーツにとらわれ過ぎず「どのようなスポーツをするか」ではなく、「どのようにスポーツをするか」という視点を持ち、ルールや用具を工夫、個人やグループの特性を生かせるような目的を持つ工夫が必要であると考える。

【まとめ】

導入段階では、スポーツを遊びも含む身体運動として捉え、対象(個人、集団)がどのようにスポーツをするかという視点で取り組む必要がある。

導入段階においては、身体を動かす楽しさを体感することに主眼を置き、成功体験を通して自己信頼感を持つこと、協働し合いことなどが大切である。

プログラムの作成においては、既成のスポーツにとられることなく、状況に応じてルールや用具の工夫をする必要がある。

また、スポーツ種目の運動パターンを分析し、実施プログラムと関連づける必要がある。

実践をベースにした試行錯誤が必要であり、作成 実践 反省 修正の循環を繰り返しながら行う必要がある。

【参考文献】

金田安正『重度障害児・者の身体活動を通じた社会参加の支援に関する調査研究報告書』、1998

当院におけるリハビリテーションスポーツの取り組み

大分中村病院 リハビリテーション部 リハビリテーション体育士¹⁾ 齊藤健夫¹⁾
 作業療法士²⁾ 古原岳雄²⁾ 中野良子²⁾
 国澤百子²⁾ 浅倉秀剛²⁾
 藤本邦洋²⁾ 勝田和子²⁾
 整形外科³⁾ 中村太郎³⁾

【はじめに】

当院は、救急からリハビリテーションまでの一環した医療を行っている。2002年8月より、患者様の入院中、退院後に健康で能動的な生活を送る支援として、スポーツを通してのリハビリテーション(リハビリテーションスポーツ、以後RSと記す。)を開始した。ここに、当院で実施しているRSの取り組みについて報告し、スポーツの可能性について検討する。

【リハビリテーションスポーツについて】

RSとは、心身に障害を持つ方・心身の機能が低下した方などに対して、リハビリテーション、健康づくり、生き甲斐づくり等の一環として、スポーツを用いることをいいます。病院や施設などでは、スポーツの特性を用いての治療・訓練とした動きづくりや体力を養い、スポーツ施設や地域社会などでは、スポーツすること自体を楽しむため、あるいは健康づくりのために関わります(詳細は、表を参照のこと)。

表. RSの関わり

段階	領域	医学的配慮	各領域におけるリハビリテーションスポーツの内容		
			対象者の状況	実施する運動の目的	脊髄損傷者の場合
第1段階	病院 更生訓練施設 地域社会	配慮の度合い	受傷の初期段階	疾患に対する治療的な意味合いの強い体操やスポーツ種目の実施	ボールex. 風船ex. 棒体操、ストレッチ
第2段階			ADL(日常生活動作)の確立をめざす障害者	対象者の訓練目的に応じたスポーツ種目を手段としての訓練の実施	車いす操作能力の獲得、ルールや用具を工夫しての各種スポーツを実施
第3段階			更生施設などの入所している障害者	個々の障害に適応した機能訓練を配慮しながら、体力の維持・向上、スポーツ種目の実施・体験	
第4段階			地域社会で生活する障害者	生涯スポーツ(楽しみ、健康の維持・増進など)あるいは競技スポーツ(自己の可能性に挑戦)の実施	車いすバスケットボール、ポッチャ、車いすマラソン、車いすラグビー

【スポーツのとらえかた】

スポーツを大きく分けると狭義での「ルール化された中で身体的に競い合うことを目的とした身体活動」と広義での「より人間的な価値の実現に目指し行われるとこ

ろの、精神的にも社会的にも自由な形成における身体活動」となる。前者は、バスケットボールや野球などであり、後者は前者を含み、缶けりやキャンプなどと遊びも含んだ身体活動と考えることができる。

【RSの意義】

スポーツ活動は、複雑な動きの中で実施されているため、応用的な運動が瞬間的に繰り返されるという特性を捉え、以下のような意義が考えられる。

1. 組み合わせあった応用的な動きを習得することで、社会に対応できる動きづくりにつながる。
2. 活動にバリエーションを加えることで、訓練の単調さを防ぎ、楽しく行え、積極的に取り組める。

【当院で取り組みについて】

1. 概要:

日常生活において、健康で能動的な生活を支えることを前提に、身体的、精神的、社会的な側面へのアプローチを実施している。活動は個別活動とグループ活動を実施し、患者様やグループの特性に応じた課題を設け、環境や用具の工夫、指導者との関係づくりをしながら行う。

2. 導入時期:

当院においては、PT・OTでの基本・応用的動作能力の回復を目的とした訓練に引き続き、また並行して導入している。現在は、患者様の状況に応じて、RSへのモチベーションのある方を対象に行っている。

3. 診療点数:

現在、OTの訓練の一環として、診療点数を取っている。RS単独でとることができない状態である。

4. 対象疾患：

剝髄損傷 6 名、脳血管障害 4 名、脳性麻痺 1 名、パーキンソン病 1 名

5. 効果：

身体的な効果 - 車いす操作能力の獲得、身体図式の再構築、体力の向上

精神的な効果 - 協働すること、自己信頼感、意欲の向上、自己実現

社会的な効果 - 社会参加へのきっかけ作り

6. 退院後の状況：

地域のスポーツ教室や大会への参加 5 名

転院、更生施設への入所 3 名

外来でのグループ訓練への参加 4 名

在宅 1 名

7. 活動内容：

個別活動と集団活動を実施しており、時間は個別活動が 40 分～1 時間、集団活動が 1 時間程度である。

具体例

車いす操作能力の獲得

ボディイメージの再構築

体力の維持・向上

社会参加のきっかけ作り

【考察】

約 1 年間、当院にて活動を実施し、急性期の病院でスポーツを通したリハビリテーションを実施することは可能であると実感している。診療報酬や明確なエビデンスが十分でないという課題があるが、スポーツを既存の身体活動と捉えるのではなく、遊びも含む身体運動と広義にとらえることで、スポーツの特性である 応用的な運動が瞬間的に連続して繰り返されること、バリエーションが加え易く、訓練の単調さを防ぎ、楽しく、能動的に行えること、まわりの状況に適應できる身体作りが可能であること等から、日常生活において主体的な活動につながることもまた、家庭や施設等の地域社会において、少しでも積極的に自分自身の生活を創造していく能力を引き出していくきっかけ作りになること、体力の向上につながることも、コミュニケーション作りにつながることもなどが考えられる。

【まとめ】

1. スポーツを広義にとられていくことで、リハビリテーションで活用することが可能である。

2. 効果として、次のようなことが期待でき、患者様の日常生活における主体的な活動につながる。

状況に意識的に働きかけ、動く身体づくりが可能になる、

家庭や施設等の地域社会において、少しでも積極的に生活を創造していく能力を引き出していくきっかけ作りになる。

健康の維持・増進

体力の向上

コミュニケーション作り

3. 診療点数の問題、明確な評価やエビデンスが不十分なため、実施していくうえで課題が多い。

4. 活動を実施していく上での、環境整備が必要である。

【参考文献】

1. 金田安正著：総合リハビリテーションにおける『機能訓練』の充実に向けて - リハビリテーション体育専門職員の養成について - 戸山サンライズ情報 1992 年 2 月号から一部変更して抜粋

2. 金田安正著：リハビリテーションマニュアル 7「リハビリテーションにおけるスポーツ」より抜粋

3. 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 リハビリテーション体育学科・リハビリテーション体育学科同窓会著：国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 リハビリテーション体育学科創立 10 周年記念誌『風をあつめて...』

水中体操

～運動プログラムの拡大～

身体障害者更生施設 青山彩光苑

ケースワーカー 大林 尚美

1、はじめに

水中での運動は、陸上に比べ「浮力」「抵抗」「水圧」「水温」という水の特性により、関節への負担が少なく、障害を抱えている人でも有効な運動とされている。今回、当苑利用者にこの水中運動を平成14年11月より運動プログラム「水中体操」として導入してきた。その取り組みでの効果について報告する。

2、対象者

対象者は当苑リハビリテーションセンター - ションセンタ - 利用の女性3名である。対象者の詳細は下記に示す。

名前	診断・障害名	年齢	移動状況	目的
I	脳内出血 右片麻痺	27	独歩	体力向上 ダイエット
S	脳性麻痺 左片麻痺	40	独歩	体力向上 ダイエット
F	脳梗塞 右片麻痺	62	独歩	体力向上

3名のうちI氏、S氏の2名は平成14年11月、F氏は平成15年4月より水中体操を希望され、プログラムを開始した。

3、方法

日時： 週1回(木) 13:45～15:40

入水時間 14:10～15:00 約50分間

場所： 健康増進センター - アスロン

実施内容：

プ-ルサイドでの準備体操 …… 5分間

水深80cm歩行浴泉での水中ウォ-キング、水中体操(屈伸、足上げ、膝上げなど9種類)

…… 20分間

水深120cmプ-ルでの水中ウォ-キング

…… 20分間

リラクゼ-ションバスで半身浴 …… 5分間

評価方法： 形態測定(体重、ウエスト、ヒップ、大腿周径、下腿周径) 筋力測定(股関節屈曲伸展力、膝関節屈曲伸展力) 体力測定(50m歩行所要時間、12分間歩行移動距離)を約3ヶ月ごとに、肺活量は、実施期間前後に測定した。筋力測定は徒手筋力測定器MICROFETを使用した。

4、結果

形態測定:(運動実施期間前後の差)

	体重(kg)	W(cm)	H(cm)	大腿(cm)	下腿(cm)
I	-4.8	-4.5	-6.5	0	0
S	-1	-2.8	-1.5	+3.5	-1
F	+1	-4.5	0	+1	+0.2

(W:ウエスト、H:ヒップ、周径:健側のみ表示)

筋力測定:対象者の理解力が低く、測定値にかなりのばらつきがあるため、信頼度が低かった。

体力測定:(運動実施期間前後の差)

	50m歩(秒)	12分間歩(m)	肺活量(cc)
I	-11"52	+89	+300
S	-12"00	+115	+100
F	+1"53	+83	+580

5、考察

結果より、体重は2名、ウエスト、ヒップは全員が減少傾向を示し、また、下肢の周径においては、維持もしくは増加するといった傾向が見られた。これは、対象者が、体全体を引き締め、主要筋である下肢の筋肉が増加した結果であるのではないかと考えられる。また、50m歩行所要時間の結果より、2名に関して短縮した。これは、歩行時のスライドの延長やキック力の増加、下肢の可動域の拡大がはかれたものと考えられる。12分間歩行移動距離では全員が増加した結果となった。これは、全身持久力の向上がはかれたと考える。肺活量では全員が多少の増加傾向が見られ、心肺機能の向上が見られていると考えられる。

6、まとめ

今回、対象者となった3名は、苑内でのウォ-キングやスポーツ訓練などのプログラムを行っているため、その影響もあると思われるが、水中での運動は、心肺機能の向上、筋力の増加、可動域の拡大、代謝機能の向上などの効果が陸上での運動より効率的に効果が出るとされているため、水中体操の影響もあったと思われる。

また、対象者からは、実施中「楽しい」や「気持ちいい」などの声が聞かれ、意欲向上となり、健康を維持向上に不可欠な「運動の継続」につながると考えられる。さらに、水中での運動は、下肢への負担が低いため、障害を持った対象者にとって有効な運動プログラムになっていると思われる。

以上のことから、今後も利用者が、個々の目標を達成するために、水中体操を含めた運動プログラムの継続が必要であると考えられる。

重度身体障害者の 集団スポーツ・レクリエーション活動への取り組み

都道府県 石川県
施設名 青山彩光苑ライフサポートセンター
発表者名 大林尚美（ケースワーカー）

．はじめに

当施設の入所定員は100名で、介護度によって重度棟50名、最重度棟50名に分かれている。その他に通所療護、ショートステイ事業も実施している。当施設のスポーツ・レクリエーション活動(以下、スポレク)は、開設当初より利用者の個々の身体状態(疾患別、障害度別)や知的レベルを考慮して、小グループ単位で行ってきた。この状況の中、新たに利用者の活気のある場の機会となることを目的に、平成13年度から重度棟の利用者を主な対象にした集団スポレクの導入を図り実施してきた。今回、この取り組みについて報告する。

．対象

集団スポレクの主な対象者は、重度棟の利用者の50名である。その内訳は、年齢23歳～69歳の男性32名、女性18名である。障害原因疾患の状況は脳性麻痺20名、脳血管障害13名、脊髄損傷9名、頭部損傷2名、その他6名で、身体機能、知的レベルがさまざまである。(平成14年12月現在)

．方法

1. 頻度 週1回(水)1回60分(14:00～15:00)
2. 参加形態 利用者の自由意志による参加(オープン)
但し、声かけ、誘いかげの働きかけは行う
3. 援助スタッフ

企画・運営に携わるスタッフはPT、OT、ケースワーカー、ソーシャルワーカーと多種目である。企画は、これらのスタッフの中から3名が月別に担当している。運営は、企画担当者に加えて8名～12名で、ゲームに参加すると共に参加利用者のサポートも行う。

．プログラム内容

1. スポーツ・レクリエーション種目

これまでに実施してきた集団スポレクの種目は、スポーツ的ゲームであるベタンク、ボーリング、風船バレーボール、玉入れなどや、知的ゲームであるクイズラリー、×クイズなど、また、季節行事、イベントに関連させたゲームなどであり、これらを利用者向けに道具やルールをアレンジして、組み合わせたものである。これら集団スポレク活動はチーム対抗戦で、個人戦、団体戦を取り入れながら得点を競う方法で行った。(表1、2)

2. プログラムの流れ

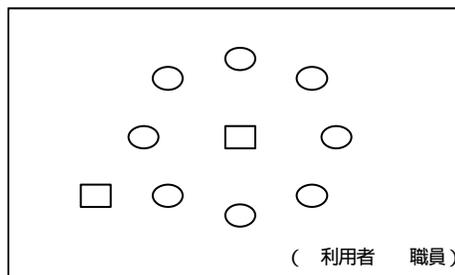
時間	項目	具体的内容	操作・留意事項
30分	1. 準備	会場準備 開催のお知らせ 参加への声かけおよび誘導 集合	・プログラム内容に応じたの会場準備を行う ・参加を促し、参加意思を確認する ・白版にてメンバー表を掲示し、定位置に移動しやすくする
60分	2. プログラム展開	オリエンテーション 主活動 成績発表	・全体にわかるような声であいさつ、説明を行う ・活動場面から普段みることのない参加者の良い場面を誉める ・成績は各チームを賞賛する
10分	3. 終了	後片付け 反省会	・プログラム実施前の環境に戻す ・表情の変化、感情の表出など活動したことでの個々の変化をあげる ・プログラム内容、進行上の問題点をあげプログラム内容の見直しを行う
その他	4. 記録	実施内容の記録	・プログラム内容、実施中の操作、反省を記録する

3. 実際のプログラム

円陣風船バレー

内容 チーム内で風船を床に落とさないように打ち続ける。

- ルール
- ・真ん中の職員プレーヤーは固定。
 - ・外側の職員プレーヤーは周りのみ移動可能。
 - ・職員プレーヤーは風船を一回しか打てない。(連続しない)
 - ・真ん中、外側の職員プレーヤー間で連続して風船を打つのは一回のみ。
 - ・利用者プレーヤーは何回風船を打ってもよい。
 - ・全プレーヤーの体、どの部分を使っても良い。
 - ・1チーム3ゲーム。3分間でどれだけ連続して続けられたか回数を競う。3分以内であったら何度もやり直し可能。
 - ・全員が風船に触れた場合、ボーナスポイントが加算される。



配置

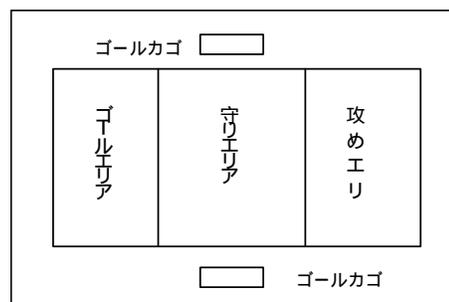
結果

通常の風船バレーのようにネットは挟まず、円陣体系を用いたことにより全員が風船に触れやすくなった。どれだけ風船を落とさずみんなで続けられることができるかという内容は参加者にはわかりやすい内容であったためか、スムーズにゲームが進行した。また、体のどの部分でも触れたら一回とみなされるため、頸髄損傷や重度の脳性麻痺者でもチームの輪の中に参加することが出来た。チーム内では、メンバーの配置や他のチームの様子を見ることでの戦略なども話し合われ、良い雰囲気であった。ゲーム中は落とさないようお互いに声を掛け合う様子や、回数を数えながら行う参加者もおり盛り上がった。そして、このプログラムは1回で終了せず、3週にわたり行った。そのため、参加者は要領をつかみ徐々に上達する様子が見られた。

ハットリ競争

内容 エリア内で攻めの人か帽子をかぶり敵のゴールに帽子を入れる。敵の守りはゴールさせないように防衛し、帽子を取る。

- ルール
- ・全員車椅子に乗り実施。
 - ・1試合3分間
 - ・2チーム対抗



配置

- ・攻め6人、守り3人で実施。
- 攻めは帽子をゴールに入れたら得点となる。また、守りエリアで相手チームに帽子を取られても攻めのエリアに戻り新しい帽子をかぶって何度でもゴールを狙うことができる。ゴールは3箇所。ゴールエリア帽子1個1点、サイドのかが2箇所帽子1個2点。
- ・職員は帽子をかぶせる介助、移動困難な方の介助のみ行う。

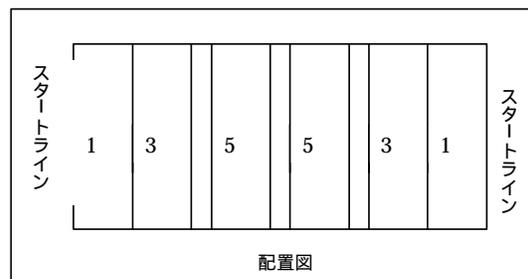
結果

今回のゲームは敵の守りをかいくぐり帽子をゴールに持っていき、反対に帽子をゴールに入れないように必死になって守るといった内容のため競技性が高く活動量があり、見ている側も十分に楽しみを感じていた様子が伺えた。また、攻め、守りと役割を分けることにより機能レベルに応じた各自のポジション決めが可能となった。全員車椅子使用で行った結果、立位者、車椅子者が同じ高さで競技に参加できるものとなった。しかし、競技中、帽子をかぶせる、移動介助を行うなど職員の配置に不足な点や、得点を1点、2点と区別したため集計に時間がかかり進行が止まってしまう場面があったことが反省点で上げられる。

ペタンクカーリング

内容 配置図のように両サイドからスタートラインを設け4チーム一斉にペタンクの球を投げる。得点はスタートラインよりカーリングのように投球有効ラインを設け、そこに10、30、50点と得点エリアを決め、止まった場所で得点が入る。

- ルール
- ・チーム対抗個人選で行う。



- ・1人2回投げ、2回投げ終わった時点の得点が各チームの得点となる。
- ・相手チームの得点エリアに入った場合、相手の得点となる。
- ・ベタンクルールと同様、相手の球を弾き飛ばしても良い。
- ・投球は手、足、補助具使用と各自がやりやすい方法で行う。

結果

ベタンクは、日頃より当施設で楽しられているゲームの一つである。そのゲームの得点方法を手前から10点、また、相手チームエリアに入った場合は得点が相手チームの得点となるといったようにアレンジしたことにより、遠くに投げられない方でも得点が狙え、遠くに投げられる方でも相手の得点にならないよう力を調整するスリル感を味わえ、楽しんでいる様子が伺えた。また、投球方法も各自がやりやすい方法で、尚且つ上下肢とも投球が困難な方にも、道具（竹で作ったスローブ）を使用することによって活動が可能となった。

パズルでクイズ

内容 4種類の大きなパズルを館内の廊下などパラパラに貼り、各チームリーレー方式で一つずつパーツを集めパズルを完成させる。さらに完成したパズルに関するボーナスクイズを行う。

- ルール
- ・得点はパズルを完成させるタイム、パズルの完成、ボーナスクイズ3問で勝敗を決める。
 - ・パズルを集める際には、チーム内メンバーであれば、助っ人を連れて行っても良い。
 - ・職員は車椅子の移動介助、壁に貼ってあるパズルを取る介助はしてもよい。

結果

知的に問題がある人でも助っ人を付けることにより、ゲームの参加が可能となった。リーレー方式でパズルの完成の速さを競うことで競技性も高まり早く移動するといった活動する場面があった。パズルゲームを進行していく中で、どのパーツが足りない、どの場所に足りないパーツが貼ってあったなどチーム内で会話が飛び交い協力して探す様子が見られ協調性が図れた。また、パズルの完成だけでなく、ボーナスクイズを付け足すことによって逆転のチャンスができ、最後まで活動に集中することができた。

結果

今回、重度棟全利用者を対象に集団スポレクを週1回の頻度で実施してきた。この参加状況は、一回の平均参加数は13年度40名、14年度38名であった。また、その他、最重度棟・通所療護・ショートステイの利用者の参加を含めた平均参加数は13年度56名、14年度45名であった。（表1、2）

参加者の中には、日頃、居室ばかりで過ごされ、グループワーク、訓練等には参加せず、集団スポレク導入当初は参加を拒否されていたが、声かけにより参加するようになった利用者がみられ、また、活動中、ただ見ている利用者の中でも、ルールや道具を工夫することで、できるプレーが増えた。そして、参加者からは日常では見られない動きや表情などが多く見られた。

集団スポレクについて、今年度4月にアンケートを行ったところ、46名の回答が得られた。その結果、「参加している」と回答した者37名であった。その中で、「自主的に参加」との回答は21名（56.8%）、「誘われて参加」との回答は8名（21.6%）、「仕方なく参加」との回答は8名（21.6%）であった。また、「楽しさ」については、「非常に楽しい」「楽しい」との回答が28名（75.7%）であった。次に、楽しかった種目については、スポーツ的ゲームへの回答が平均22.8名（61.5%）とスポーツ的ゲーム・知的ゲーム・創作的活動の中で最も高かった。また、「参加していない」と回答したものが9名であった。その理由として「身体的問題」との回答が6名（66.7%）であった。（表3）

考察

この集団スポレクは、その参加状況や活動中の参加者の状況とその変化、さらにアンケートの結果から、目的である「活気のある生活の場」になっていたと考えられる。そして、アンケートの結果では、スポーツ的ゲームへの関心が最も高かった。これは、利用者が、競争と協力が図れる内容を求めており、一人ではなく仲間がいることでより多くの刺激や達成感を味わえるためと考えられる。

集団活動は、一人では成し遂げられないことでもまわりの助けを借りることなどから相乗効果を生み、一つの全体としての活動が成し遂げられ、仲間と喜び、楽しみを共有・共感できると考える。集団スポレクは「できる喜び」「楽しさ」の共有・共感を経験することで参加者の中に浸透し余暇的な面で充実していったと考えられる。

今後は、活動中のみならず生活全体の変化を見ることが必要である。これを踏まえて、利用者の障害者スポーツやレクリエーション活動への関心につなげ、社会参加へと波及していくよう活動の幅を広げる援助をしていきたい。

重度身体障害者の集団スポーツ・レクリエーション活動への取り組み (大林尚美)

表1 平成13年度レクスボ

	プログラム名	重度棟	最重度棟	通所/ショート	全体
4月	玉入れ	44	17	1	62
	玉入れパート2	43	17	2	62
5月	ゆらゆらゲーム	38	20	3	61
	ゆらゆらゲーム	39	17	3	59
	関所やぶり	40	14	2	56
6月	障害別リレー	24	6	1	31
	ベタンク大会	38	8	5	51
	ベタンク大会	41	4	1	46
	ベタンク大会	44	6	3	53
7月	七夕飾り付け宝探し(ゲーム式)	37	8	3	48
	ゴロ卓球団体戦	43	4	4	51
	ドキドキリレー(しりとり、バットホッポ-リング、縄跳び、ジェスチャー)	47	5	2	54
	ドキドキリレーパート(しりとり、空き缶ホ-リング、魚釣り、貝合せ、ジェスチャー)	44	3	3	50
8月	ベタンクカール	42	12	3	57
	ベタンクカール	37	8	3	48
	ベタンクカール	45	10	3	58
9月	大声なんでしょう大会	46	15	3	64
	関所やぶり	40	12	3	55
	×クイズ	41	12	3	56
	風船運びリレー	42	10	2	54
10月	関所やぶり、言葉作りゲーム	38	14	3	55
	ウォークラリー	40	17	4	61
	いも運びと焼きいも大会	40	14	5	59
	苑内ウォークラリー第2弾	43	17	5	65
	関所やぶり、言葉作りゲーム	33	17	4	54
11月	パズルでクイズ	39	18	4	61
	変則玉入れ	38	14	5	57
	お買い物かご満杯レース“美味しいおでんを食べよう”	42	14	5	61
	新聞で遊ぼう	41	15	6	62
12月	ベタンク缶ホ-リング	38	15	5	58
1月	新春ゲーム大会“すごろく”	42	14	5	61
	新春ゲーム大会“かるた”	41	9	7	57
	新春ゲーム大会“年賀状を作ろう”	41	15	6	62
	新春ゲーム大会“書き初め”	39	15	7	61
2月	鬼は外、福は内(関所やぶり、的入れ)	48	14	7	69
	鬼は外、福は内(関所やぶり、的入れ)	42	15	6	63
	鬼は外、福は内(絵カード取り競争、クイズ)	41	19	5	65
3月	冬季パトニック大会(クイズリ-)	33	10	5	48
	冬季パトニック大会(射撃大会:バタビア-チリ-、缶ホ-リング、スプ-ンでピンホ-飛ばし)	32	12	4	48
	冬季パトニック大会(ホッケー:相手チームエリアに風船を入れる)	41	15	5	61
	冬季パトニック大会(障害物リ-)	37	17	5	59
	のべ人数	1644	518	161	2323
	1回平均	40.1	12.6	3.9	56.7

重度身体障害者の集団スポーツ・レクリエーション活動への取り組み (大林尚美)

表2 平成14年度スポレク

	プログラム名	重度棟	最重度棟	通所/ショート	全体
4月	関所やぶり	43	10	1	54
	しりとり、ベタンク、空き缶ボーリング、春をさがせ	44	4	3	51
5月	YES/NOクイズ	38	9	0	47
	騎馬戦(麦わら帽子取り)	45	5	2	52
	玉入れ	35	6	4	45
6月	帽子はこび	43	8	3	54
	運動会式玉入れ	38	15	4	57
	ハットリ競争	49	1	0	50
	満杯レース	37	9	3	49
7月	七夕作り	38	3	3	44
	氷とかしゲーム	36	4	4	44
	風鈴作り	20	14	3	37
8月	満杯レース特別版	34	6	3	43
	ラケットレース	36	6	5	47
9月	風船バレーの技術みがこう大会	36	4	2	42
10月	もみじ狩り競争	36	0	2	38
	食欲の秋合戦	38	2	1	41
	さんまが秋空を舞う	40	0	1	41
11月	円陣型風船バレー	41	1	2	44
	円陣型風船バレー	41	2	4	47
	円陣型風船バレー	38	0	2	40
1月	万歩計みんなで2003を目指そう	40	1	3	44
	Let'sフリフリ2003	39	0	3	42
	2003をひっくり返そう	42	1	3	46
	万歩計クイズ	43	0	2	45
2月	エンジョイスローイング～輪ボール～	38	0	4	42
	絵ヒントクイズクロスワードパズル	34	0	2	36
3月	春よこいこいピンゴ大会	36	1	2	39
	ベタンクボーリング、ビーンバックストラックアウト、紅白的入れ				
	ベタンクボーリング、ビーンバックストラックアウト、紅白的入れ				
	のべ人数	1078	112	71	1261
	1回平均	38.5	4.0	2.5	45.0

第27回日本障害者体育スポーツ研究会

会場：長野県障害者福祉センター サンアップル 日にち：平成15年10月4・5日

テーマ：脳血管障害者のアーチェリーへの取り組みについて

キーワード：脳血管障害者（片麻痺者）、リリーサー、補助具

発表者：大河原 裕貴（RS6期生）

〔社会福祉法人 名古屋市総合リハビリテーション事業団 スポーツ事業課 体育指導員 名古屋市障害者スポーツセンター勤務〕

1、はじめに

アーチェリーは障害のある無しにかかわらず参加できる競技であり、障害者と健常者が同じ大会に出場し記録を競い合うことのできる数少ない競技である。名古屋市障害者スポーツセンターでは、アーチェリーを体験してみたり、大会に向けて練習したりできる時間を設けている。そこには車椅子使用の対麻痺者や切断などの下肢に障害を有するものが多く参加しているが、上肢片麻痺者は参加が難しいというのが現状である。

ある一人の脳血管障害者の片麻痺者より、「私のような脳血管障害者で片手しか使えない人でもアーチェリーはできる？」という問いかけにより、脳血管障害者の片麻痺者にもできる方法を検討することとなった。

そこで今回は、当センターで考え出した行射方法について報告する。

2、方法

(1) 対象

Kさん：右側片麻痺、63歳、男性、

ブルストロップ（以下、Br.stage）

上肢、下肢、指

Mさん：右側片麻痺、49歳、男性、

Br.stage 上肢、下肢、指

*2名とも右打ち（左=押し手、右=引き手）

(2) 道具

弓：リカーブボウ（16ポンド）

リリスに使用する道具と行射方法：

A. 口に唾えるリリーサー

2名の参加者に一番初めに試した方法で、樹脂で口に唾えられるサイズのものを作り、それにL字型の鉄製のフックを取り付けた（図1-1）。方法としては丸い部分を口に唾え、フックに弦を引っ掛け、健側の上肢で弓を押し、セットアップ、ドロイングに移る（図1-2）。エイミングが完了次第、頸部の右回旋運動をおこなうことでフックから弦がはずれ矢が放たれる。

B. リリーサー（リストストラップ、メカニカルタイプ、図2-1）

Kさんの行射方法で、Br.stageの指がと指でのフックが難しいが、上肢がのため、患側上肢の肘が肩より上方にあげることができ、肩甲骨の内転運動が可能である。そのため患側手関節（前腕外側面）にリリーサーを取り付け、健側上肢でリリーサーに弦をはめ込み（図2-2）、健側の押し手動作、体幹の回旋、肩甲骨の上方回旋（図2-3）から下方回旋（図2-4）の動き、肩関節水平位伸展を利用してセットアップ、ドロイングをおこなう（図2-5）それらの動きに伴い、下顎の位置にリリーサーが移動してきたところでトリガーを押し、矢を放つ。





図2 - 3、上方回旋(セットアップ)



図2 - 4、下方回旋(ドローイング)



図2 - 5、エイミングの様子



図3 - 1、補助具(正面)



図3 - 2、ドローイング



図3 - 3、矢とり

C. 下顎部にリリーサー (Bで使用したものと同一) を固定できる補助具

Mさんの行射方法で、上肢のBr.stage が のため、上肢の動きを利用しての方法ではなく、リリーサーが下顎部に固定できる補助具(右側胸部、肩峰部、肩甲棘部に支点をとる補助具を作成し、健側の脇(腋窩部)にベルトをとおし固定する。また、左側の腋窩部にもベルトをとおして固定し、さらにはマヒ側の上腕を体幹に固定する。)を製作した(図3-1)。

とりかたは健側で弓を誘導しておこない、健側の押し手動作と体幹の回旋を利用してドローイングする(図3-2)。この時、Kさんには見られた肩甲骨の動きがMさんには見られなかった。

エイミングができたところで下顎の位置にあるリリーサーのトリガーを押すことで矢を放つ(トリガーには接触面が増えるようにプレートを取り付ける)。

矢とりは(Bの方法をとっている)Kさんとも共通しているが、健側の肩、肘を畳に押さえつけるようにあてて、肩関節の内旋させて矢を抜く(図3-3)。

3、まとめ

2名の参加者は、初め非常に不安そうな様子で教室や練習日(個人的にアーチェリーの練習ができる時間)に参加していた。しかし、今では2名ともそれらに自主的に参加するようになり、他の参加者と共にコミュニケーションを図りながら仲間作り、技術の向上等に勤むようになった。

また、これらの成果により、当センターでのアーチェリー志望者が増えてきているのは事実である。

今回のこれらの方法ならびに補助具を開発するにあたって障害者アーチェリークラブ、アーチェリー連盟、ボランティア、リハビリテーション工学技師等の様々な協力、助言のおかげで達成することができた。紹介した方法以外にも、障害特性に対処した道具や行射方法が見つかる可能性は十分にある。今後も障害者の求めるニーズに応えられるよう他部門、他機関等の協力を得ながら開発、紹介して脳血管障害者の行えるスポーツの一つとしていきたい。

超重症児者のプール活動の意義について

心身障害児総合医療療育センター むらさき愛育園（東京都）（定員132名）（昭和42年5月開設）

藤村和也（リハビリテーション体育指導員） 小泉智（児童指導員） 古屋直子（看護師）

1. はじめに

重症心身障害児の中で超（準超）重症児者は、一日の大半を寝たきりの状態で過ごし、緊張、変形、呼吸困難などで、リラックスした状態を維持できないことも多い。この状態を少しでも改善させ、快適な生活を送ってもらうためのプログラムの充実が求められている。今回はこの中で、病棟として取り組んできたプール活動を紹介し、その意義を考察する。またプール活動に必要な条件も提示していく。

2. 対象者及び実施計画

対象者：むらさき愛育園西2階病棟在園の利用者33名 うち超重症13名 準超重症6名 気管切開8名
人工呼吸器常時使用6名 随時使用1名 経管栄養22名 全員大島分類1 年齢13歳～56歳 平均33歳

このように超重症児者が多数含まれるが、人工呼吸器の一時離脱が困難な利用者及び急性期症状にある利用者を除き、全員をプール活動の対象とした。

プール環境の設定：プールはセンター内の室内プールを利用 面積10m×5m 水深120cm 水温32 室温33 以上 水温室温は調節可能であるが、活動参加前後の気温が低いと感冒等の症状を起こしやすいため、期間は6月～9月の4ヶ月間に限定した。活動後の体温確保のため、プール施設内の浴槽にて入浴を行った（水温39～40℃）。

実施方法：プール活動参加計画は病棟保育・指導職で企画し、プール活動指導の専門職員（リハビリテーション体育指導員：以下リハ体育指導員）が1名参加した。リハ体育指導員は活動プログラムを作成するとともに、担当職員へのプール活動と介助技術を指導した。当日の参加の是非は医師及び担当看護師がチェックを行った。

プログラムは毎回2名の利用者で組み、各利用者に1名職員がついた。同時に上記リハ体育指導員が入った。病棟職員に看護師も含まれるが、全員水中での活動に参加した。

特殊な対応：気管切開の利用者には気管に水を入れないための姿勢の工夫及び浮助具の活用を行い、プールサイドに吸引器の設置、看護師の活動への参加を義務づけた。

人工呼吸器の利用者の多くは呼吸器を外して酸素を流す状態で短時間は活動できる状態であったので、人工呼吸器の一時離脱が不可能な利用者以外全員を対象とした。また介助者を1名増員し、緊急時にはバギングも行えるように看護師の活動参加も義務づけた。

胃瘻の利用者はボタンの上からシール（テガダーム）をして水に入った。

3. 結果

プールの中では日常生活と比較して、身体的にリラックスし、感情面で笑顔などが見られ、部分的にはあるが自発運動が可能になる利用者も見られた。気管切開の利用者には上記に加え、排痰の量・頻度の増加が見られた。医療面で問題となる出来事はなかった。活動後にプール活動によると思われる体調不良も見られなかった。

4. 考察

超重症児者プール活動についてはそこまでやる意義があるのか？安全性は確保できるのか？効果はあるのか？等多くの議論があると思われる。今回私たちが取り組んだ結果、快表情が見られ、身体がリラックスし、部分的には自発運動も出てきたこと、実施中・後で医療的な問題はなかったこと等から一定の意義と効果があると考える。但し、その実施のためには医療・看護・指導等の協力と慎重な検討、専門スタッフの参加等が不可欠であろう。

5. まとめ

超重症児者にもプール活動に参加してもらえること、一定の意義があること、実施には関係職員と指導スタッフの協力と、適したプール環境が大事なこともわかった。現在のところ、1名の利用者につき年間平均で1・2回程度しか計画を組んでいないが、連携している養護学校の先生による計画も同時に立てられ、就学年齢の超重症児では更に発展が可能になってきている。今後も経験を重ね重症児者のプール活動の意義を確認していきたい。